



特10  
975

091809-000-2

特10-975

当世娘性質

四文字舎 半笑/著

M19

DBO-0325



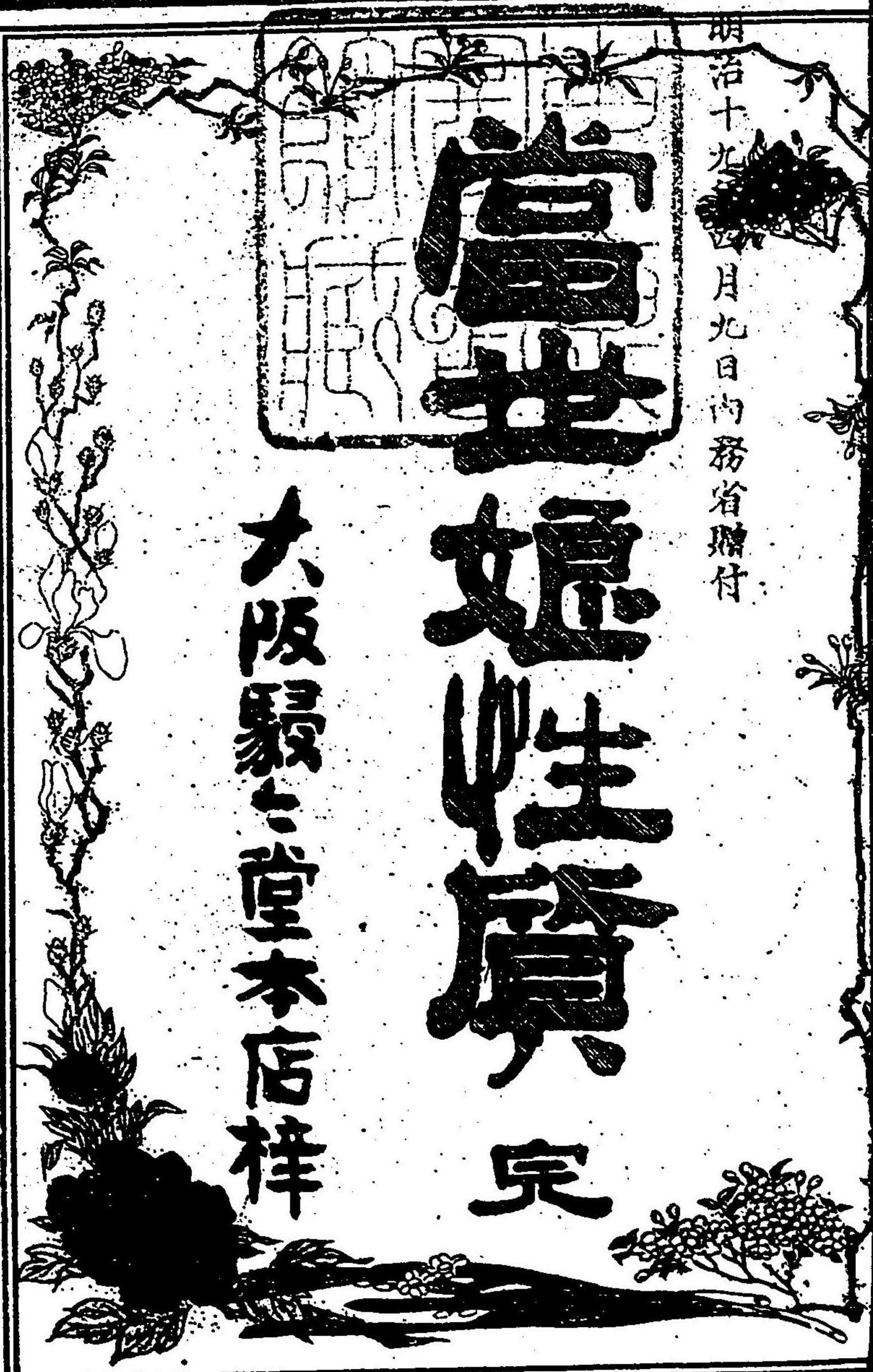
5199

特 10  
975

富世  
娘性  
質  
完

大阪巽三堂本店梓

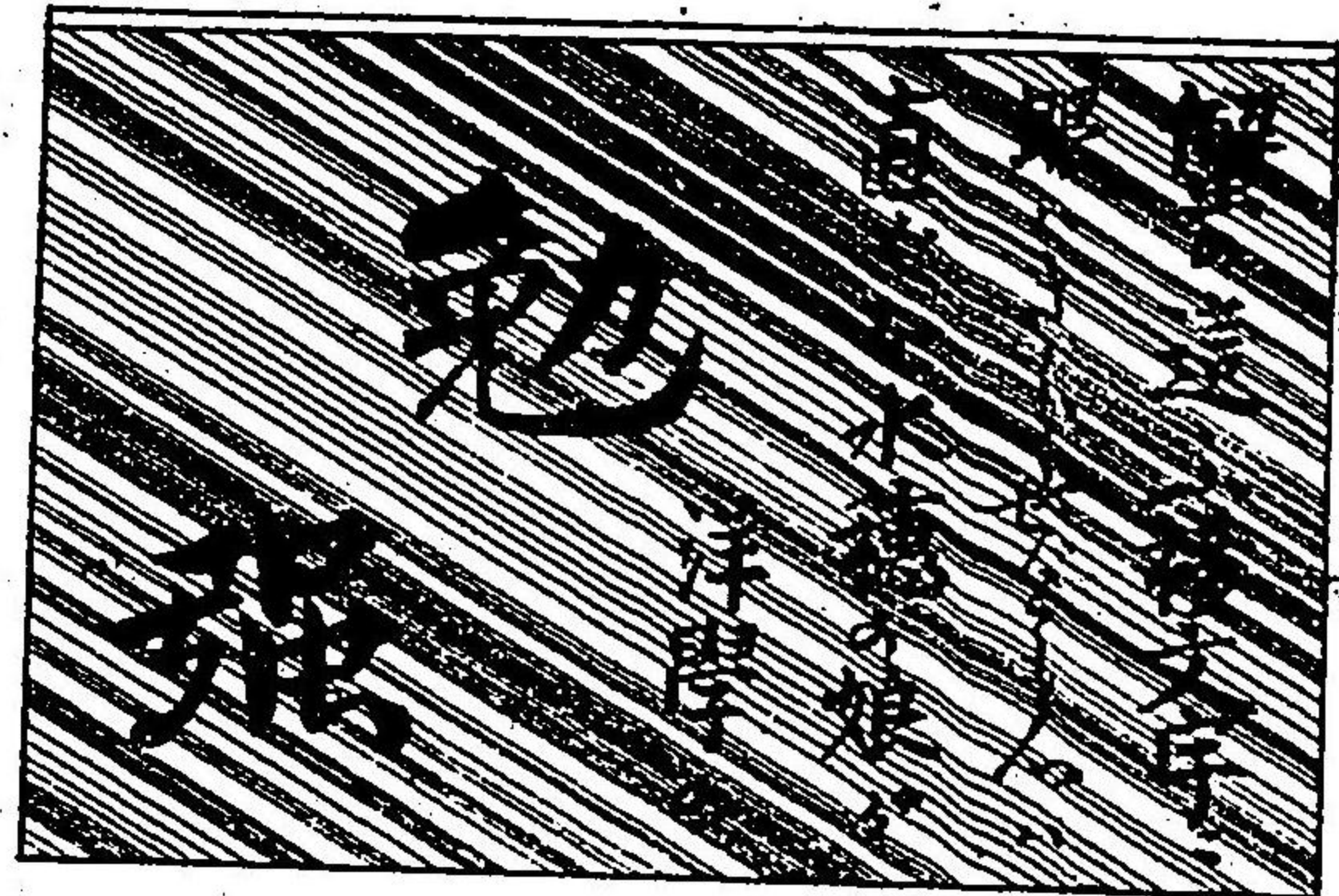
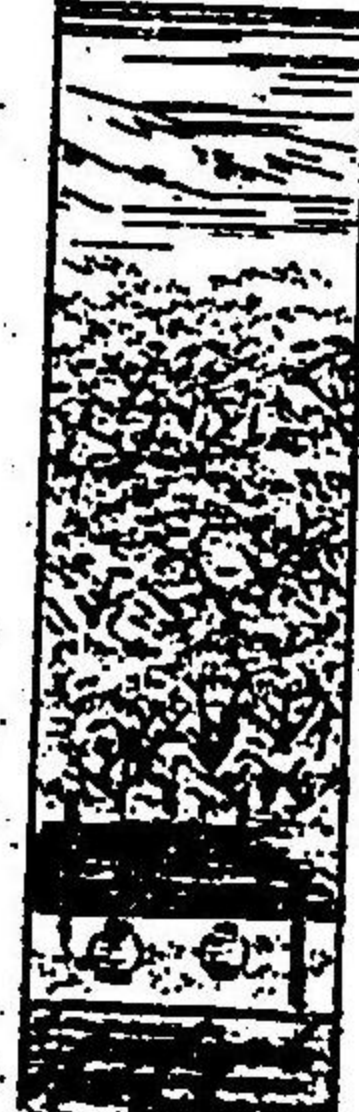
明治十九年四月九日商務省贈付

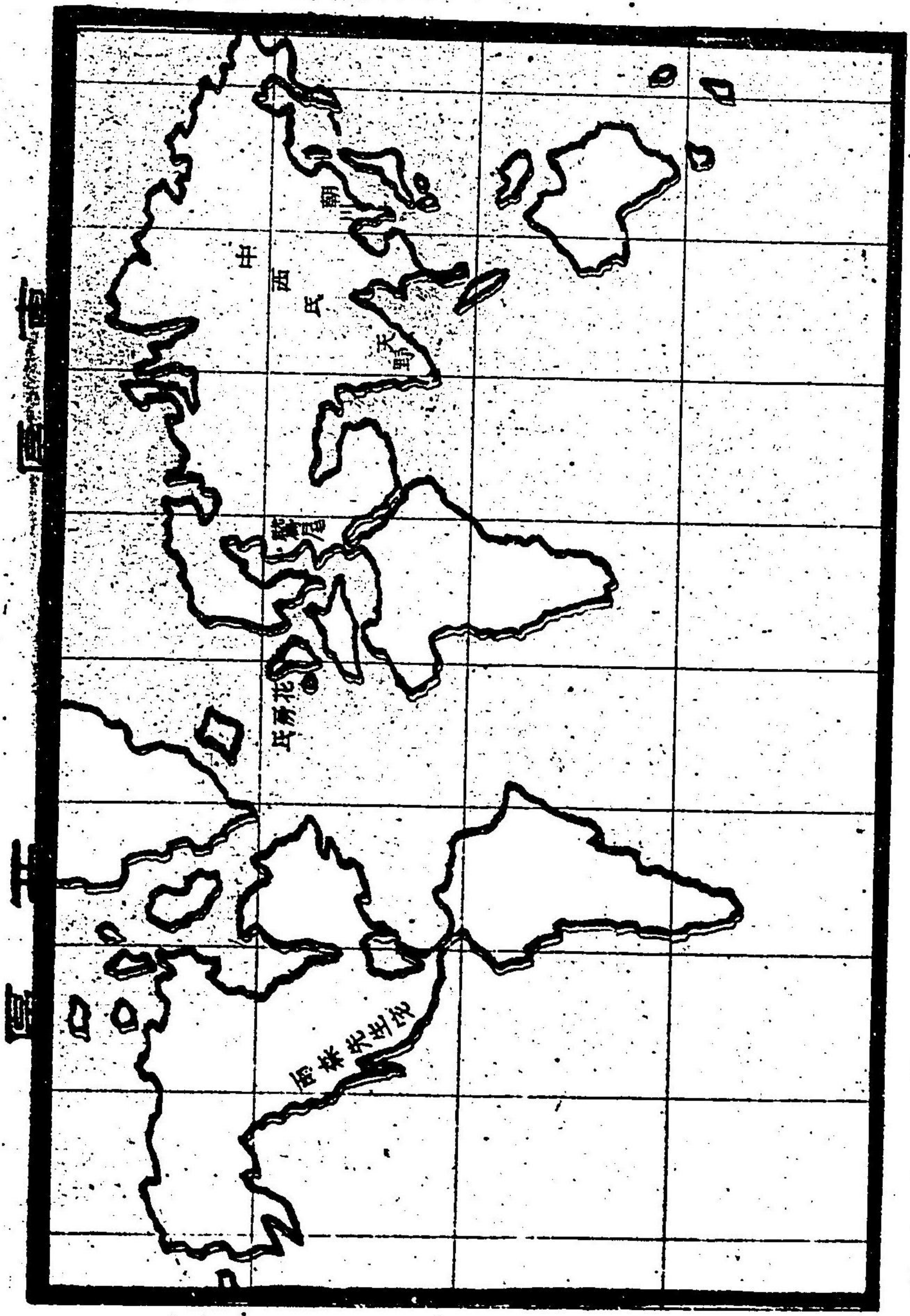




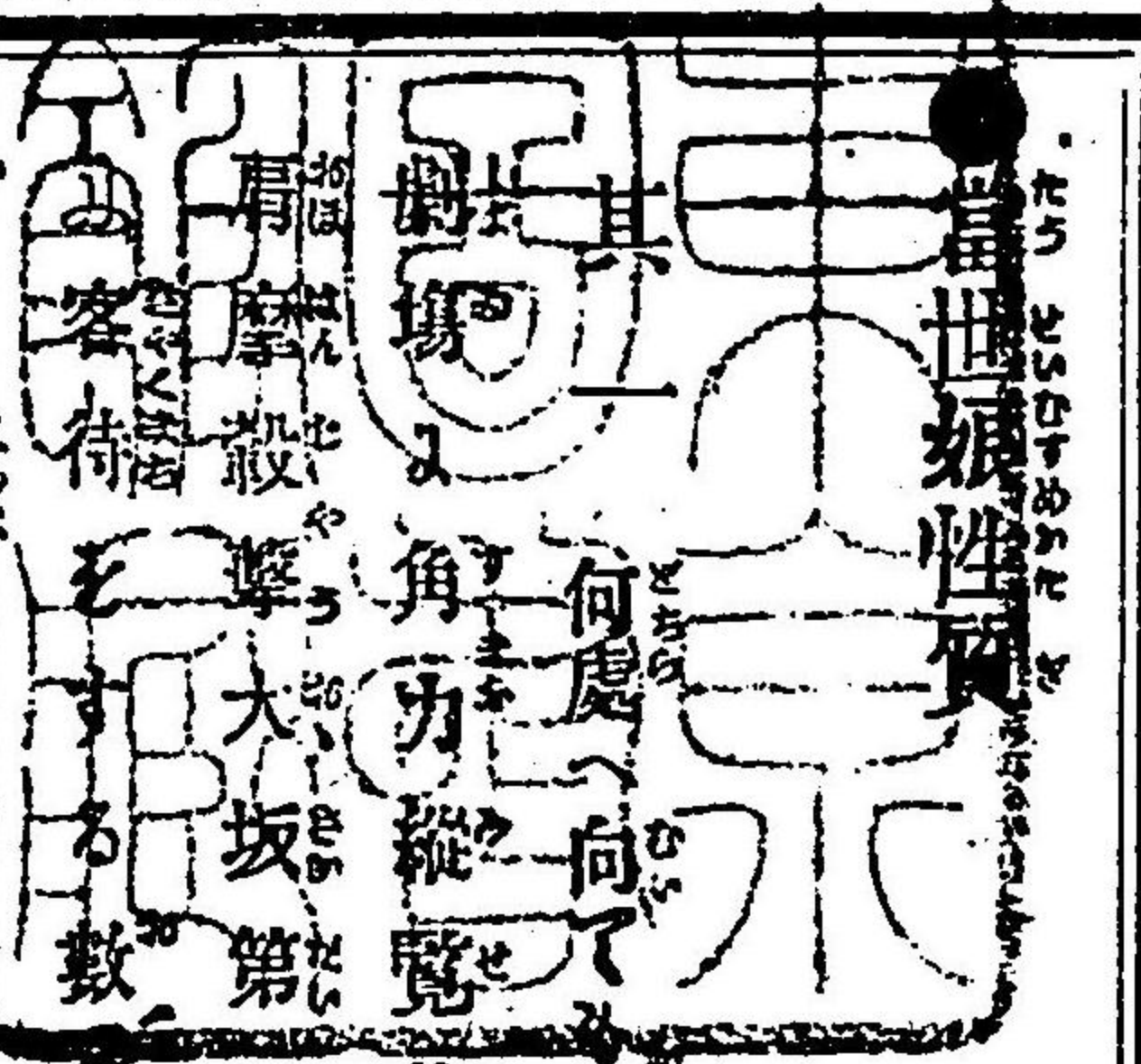
岐劉關張  
 昔桃谷結  
 義姊妹當  
 世三人娘

長樂書





四文字舍半笑稿

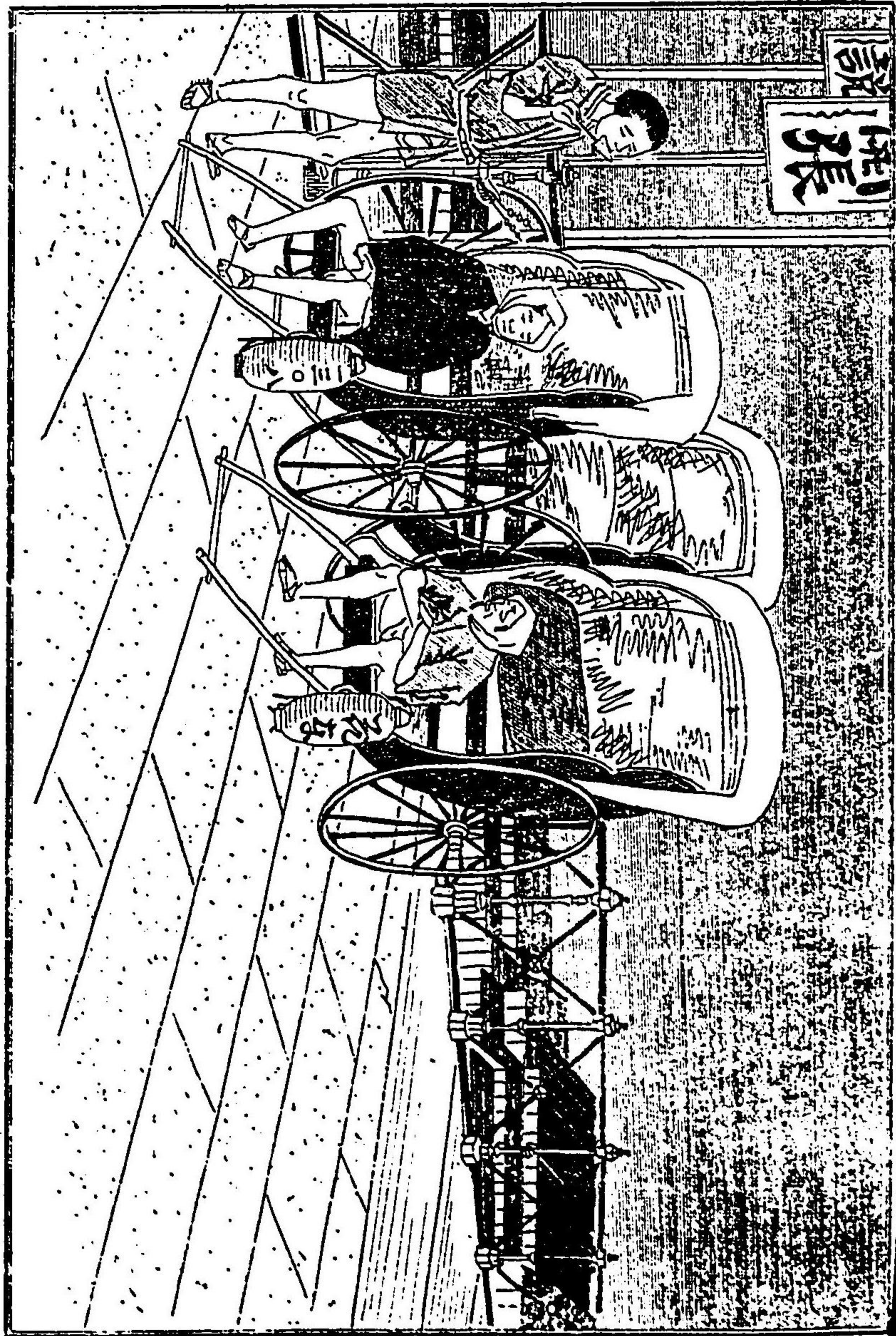


當世娘性質  
 何處へ向ても歸車と口車に客乗る客待の車夫  
 角力縦覧物小屋青糶料理商の軒を併べ夜晝どなき  
 肩摩殺撃大坂第一の繁華の地道頓堀架渡す戎橋の南詰  
 客待をする数多くの車夫旦那車ハドゥでござります北へ  
 去ぬ車でござりますから安くお伴を致しますすモシ出来  
 ほへんかエナモシ出来まへんかア一々今夜程客の物を  
 迎かさぬ晩もねるものだ天清の蠟燭一本流して交番所  
 の前から戎橋の中央までお百度を打ても横又冠りを振向  
 く所か正面切ぬまゝ物も迎ふさす適々ぬかせば三津寺筋  
 たどか八幡筋たどか云て乗るやつ一人もなし日本第一

の地價を納めて日本第一の繁昌の地といつても此う淋し  
 づての眞に困るぢやアねへかと思痴をこぼしているその  
 傍から一人の車夫が笑むかけ「コウ難波何を思痴をよぼし  
 てゐるのだ何ぼ汝が泣言をいつても客人の耳は聞ね  
 へるら何よもならねへ何故といつて見や處が戎橋だから  
 客尤皆聾だアハ、ハ、ハ、エ、馬鹿よするな面白くもねる時  
 難波汝昨日と今日と車が違つて居るぢアやねへか何處  
 で借きて來た乃たナニ何處で借りて來ぬと失禮なことを  
 吐すな己様の手車だ渡邊橋の長久齋や島の内猿田湯なと  
 の仕入バチとは譯が違つてゐるぞ免れも東京の秋葉大助  
 が鍛錬よ鍛錬た牡丹バチ然も時繪は中尾の東猿と來てゐ  
 るのだから長や(長町)畧言(南)渡邊村同前(一口)言きて

は閉口するのだイヤ長や南といへば彼等の仲間の中より  
 近來母衣の中へドス隠しをましらへぬグル廻りかあるさ  
 うだが隣の樽ぢやアねへるこんな評判が高くなるど自然  
 乗客が少くなる譯だ「チイ」長が南の譯つたがグルを廻  
 すとい何の事だナニグルを廻すを知らねへと汝も此商賣  
 をするのら長や南の符帖モナヨトの覺えてねくが好い  
 グルを廻すとい商賣人が人車を挽くといふおとよ「ナニ商  
 賣人が車を挽くといエ、困つぬ野郎だ商賣人とは曲尺の  
 事だフン夫ぢやア泥棒が車を挽くことをグルを廻すとい  
 おのらさうよそのグルの後ろホドス隠しがあるいつても  
 分るめへ平たえいへむ抜刀と贖品に藏しが造へてあるど  
 いふおとよグルに此ういふ仕掛があることは恐く松葉も

氣がつくめへホイ又符帖が出た松葉とえ特務巡査の張番  
 のことだ何と泥棒社會も漸々進歩して種々の新發明をや  
 らかすぢやア締へかど談話の折柄演說會の終りて戎座の  
 木戸より數百の聴衆のドヤ／＼いづるよぞ之に驚き談話  
 を止めホイつまらねる談話の内に最々演說がハレた松も  
 來い虎も來いへい旦那車ハドウでござりますお宅までお  
 伴致しやせうと西又南に北又東お各自に客を乗じ皆四離  
 八分お立去りたる迹も残りし一個の車夫匹邊見廻し獨言  
 今の難波とやらの問す語り是も一條の詮議の種と傍の交  
 番所乃巡査と顔を見合す途炭又一一個往來の人の通りか  
 れ心俄又氣を轉へて聲やさしく旦那は都合までお伴いた  
 せませう



其二 人の議論を吾物顔より耳の口へ智慧の受賣する演説返りの書生

イユ一 是は前田君君も演説の傍聴かね、池上君近來  
夜業の獨逸學の勉強を始めたのでツイは無音夫は好い事  
演れ始めだ近來は獨逸學が流行だから僕も始めやうと思  
つてゐる處サ僕も又た頃來俗用よ奔走して肝心の學業よ  
さへ怠たる始末所謂貧乏暇なしで實は閉口さ時よ今晚の  
演説は如何でした多淵武吉君の經濟論辨舌といひ學識と  
いむいつもながら感服のいたゞ又久山鯨一君は岩戸神樂  
の滑稽演説神代の昔天安河原の神議を説て例の面白可笑  
國會論を辨じゑ手際聴衆の腸を判り願を解さました彼人  
の當今の蘇秦張儀と云つべし僕の腦髓よ尤も非常の感覺  
を興へたの加波龍雄君の東洋大勢論亞細亞歐羅巴と對



稱すれども其實の亞細亞の北方サイベリヤの魯西亞支  
 配にして南部の印度地方の英國の所轄となし既に其半洲  
 は歐羅巴人の手より落ち其他の半洲を國を立る者は西方土  
 耳古の管轄を除く東にアラビヤヘルチマン等の諸國は  
 れども未だ野蠻國の風習を脱せず固より獨立國の名を下す  
 るに足らず唯ヤ、獨立國と稱するに足る者は支那と日本と  
 ゐるのことは是から定めて正しく堂々の議論をするかと思ふ  
 どガラリと口調を變へて日本と支那と印度を女子と譬へ  
 英佛獨米魯等の歐羅巴諸強國を男子と譬へ男子が種々手  
 段を設け様々の辛苦を盡し或は恩を施し或は威を示し欺  
 しつ威しつして之を挑む形容も假托して今日の東洋の形勢  
 を説き吾々東洋人民の獨立の精神を鼓舞し其議論の活潑

なる其辨舌は愉快なる今夕の演説中の第一等僕の如き情  
 夫も之を聞いて思はず憤發の念を起しほした是等が實に有  
 益の議論といふのでせう尤々々僕も同感時よ君え定  
 然ては存知ならんが僕に傍るた一個は聴衆が提燈の火  
 で手帖を照し横文でもなされを梵字でもないやうなもの  
 で始終辨士の議論抜筆記してゐたがアレは何でせうウソ  
 彼か彼の近來東京から大坂へ支會を設けた日本傍聴筆記  
 法といふものでせう所謂速記法で人の談話をそのまゝ速  
 りに書取る辨利なものでアノ蚯蚓のぬたうつたやうな者が  
 即ち一種新發明の文字で一字が漢字や假名文字の數十字  
 又當るものや此速記法の事については何種か談話があるが  
 立談ではつくされなからいつれ近日お寓所へ出て緩々

演説しませす今これお話の東洋大勢論の娘のお話で思ひた  
 が君も知てる中西の娘ウン彼の唐物町の製者が何でせ  
 最う年は二十四五とくすると三十近いとうだが今も  
 島田も帯は文庫万年娘とはアノ事だらふアノ娘よつ  
 て新聞があるが知てるが「ナニ新聞アノ娘の事なら定め  
 て舊聞だらふ然し新聞でも舊聞でも構はないがさぞ捧腹  
 絶倒の一件だらふ早く聞せたまへ「好々辨士氣取で一番演  
 説しようエヘン諸君よと話し掛しをまら後ろの方よと  
 一輛の人車が走來り「ゴンサイく二人は喫驚左右も飛退  
 き「エ、權妻ぢやアねへ此方は娘の話だ  
 其三 舞臺計ては見足ないで茶屋へ俳優を呼年は廿歳困九身持の吾儘娘  
 道頓堀戎座劇場の傍なる或る劇場茶屋の二階も角れ劇場

見物の返りと見へ一個の女客が華美な酒宴四五人の若手  
 俳優も二三人の老妓幫間まで加えりて飲つ食ひつ無禮講  
 そも此女客の形容と言つを芳齡は二十を幾歳の越して見  
 めれどを裙模様の中振袖も島田鬘織物の帯或やの字も結  
 ひ花房の細工れ花簪をさしたるなどはだやうく十七か  
 十八かいふ恍惚な化粧飾三十あまりの年増と十五六の小  
 女も五十あままで頭の元し手代の附添たるは誰が目見  
 てを船場内の大家長者番附の上位を占る何の某の娘さん  
 と思ひる、が其人品も不似合なるか、る遊興こそ怪し  
 れ 幫間鈍八「ひどを外面がさうくしいが戎座の演説が果  
 ど見ゆる 幫間痴六「此頃ハ段々人間が生意氣も成て新聞たの  
 演説たのと兎角利屈張たことの大流行だ 藝妓か化ナニ演

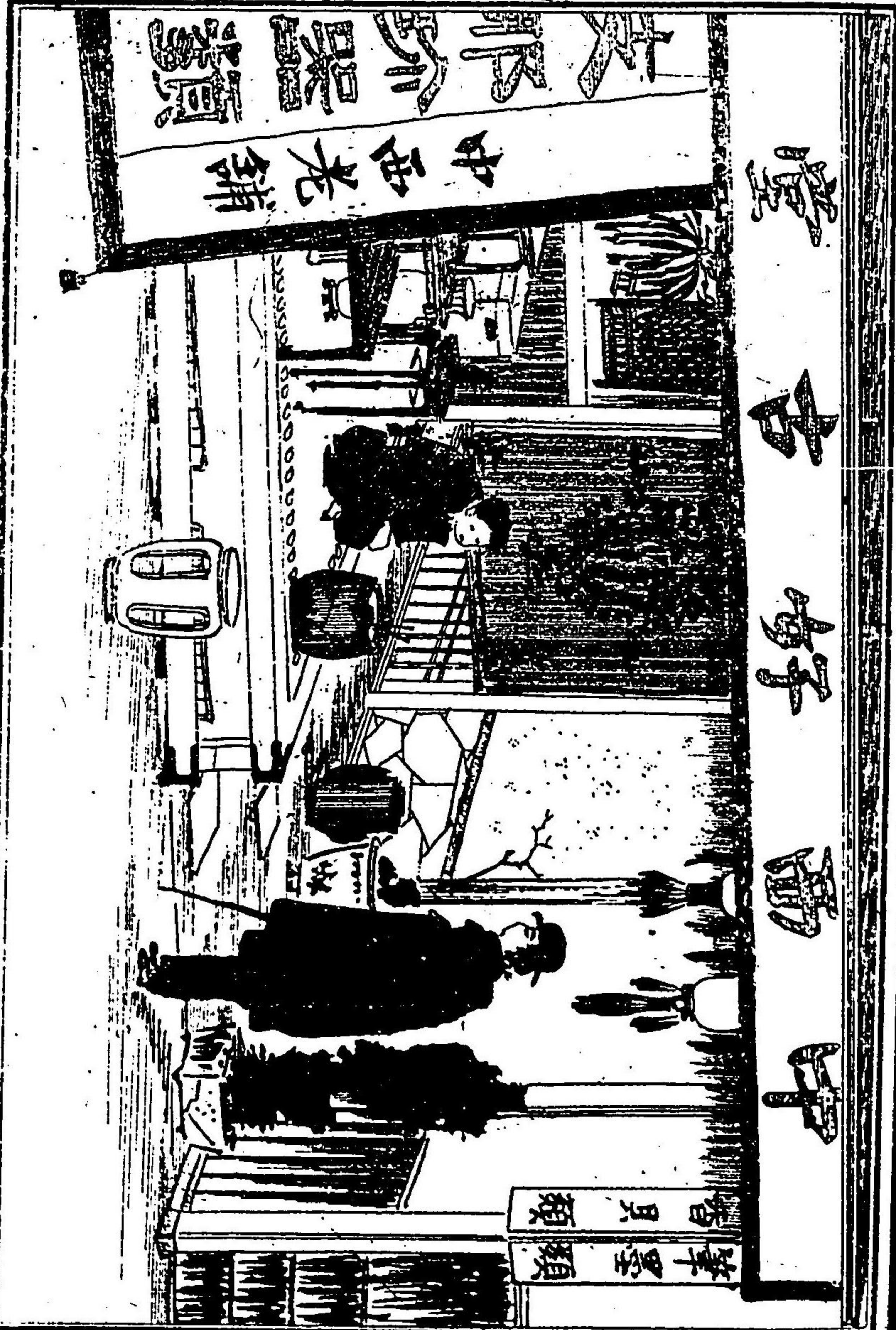
説會の流行るのは人間が生意氣よ成た計では無いよ世  
 の中が不景氣で人の心が卑しなり兎角安いものや無料  
 の物が大流行今晚の演説も傍聴無料とやらだからそれで  
 譯分らずよ聴よ行よ人が多いのでせやモお嬢さばさう  
 ではばいませんか女客お化れいふ通り無料だから聴よ  
 ゆくのは誰がお錢を出して面白くもない演説なんぞを聴  
 へ行よ人があるもの女中お松「全体あんなセの城劇場小屋  
 でさせるから夫で肝心の演説も人氣が依らなく近來  
 のとかく見物の足の薄いのでせや女中お竹「安いものが流行  
 かも知れませんが妾は劇場をかりと一圓の場が二圓して  
 も安いと思ひますね俳優一同「賛成々々 謝問鏡八「ヒヤ〜  
 カウ〜 お嬢さまの演説がお嫌いだのお諸君よの口眞似

のドウしたものだ船中にて此様のおとは申さぬものにて  
 候らふ皆々「是は閉口恐入りましたといふ折から〜今晚  
 はと次の室へ頭城下る一個の坊主鈍八は夫と見るより鈍八  
 「チ、愚七か大層おそのつたといひつ、女客よ向ひ「モシお  
 嬢さま是は新米れ謝問で私しの弟子でおさりますドウア  
 お見知りおかれまして恐入りますがお杯をコン愚七お杯  
 を戴だくが好い汝のまだ拜だ事があるまいが此お嬢様は  
 大坂中みかくれの無い唐物町一丁目の中西のね嬢様御家  
 風が好いので御成長も自然高品第一結構なよとは西洋風  
 が何よりお嫌むで俳優や藝人や藝妓がお好き御姿色は此  
 通り貴妃も西施を跣足で迎る程も此處の豪商彼處の大  
 家から聲よ這入らふ嫁よ貴はふと縁談口元雨の降るよと

おあまをあそむすあれど先方より少しでも西洋習氣があれを  
 ずくお断り此處にみあるでる親方衆のやうふ頭に鬚を結て  
 牛肉を喰す漢學が好で遊興が好で劇場が好でッシテ門閥  
 が貴くあきてハ婿よを貰ひぬ嫁にも行ぬといふ嬉しい御  
 注文偶似中の縁談はつても婚姻は人間の大礼五行陰陽吉  
 凶禍福相性相克星の善悪其他年月時方位の事まで十分  
 占ひ調べた上よも能く調べ何一つ障りがあつてを忽ちサ  
 ランバア先度も稀らしくね話の纏まよく明日の結納  
 の取替せと成た所で其日が辰の日で然も不成日であつた  
 故一日のしした處か其翌日の己の日で生憎八方塞り其翌  
 日からは四季の土用で東の方か遊行金神南の方かお嬢を  
 まの本命的殺西の暗剣殺乾と巽が破軍八將丑寅が鬼門未

好女西子

大正新編  
 中西光鋪



香具類  
 筆墨類

申が歳破と四方八方塞りもあいつそ来月お延すが好らふ  
 と御親類一統協議の上どうく来月と日延に成たが拍子  
 の悪く其翌月おらお家の本命が中央も這入て是も同く八  
 方塞り又来月お先の聳君が三年の塞りで其翌年がお嬢  
 さまの厄年かれまれて遂には破談流石は舊家故何と御念  
 の入たものでないか今時の出来星紳商とは大違ひ實に  
 感服な御家風でないかア、あんまり饒舌て息が切ふ大  
 きいもので一献頂戴お化さん憚りながらお酌をサト、  
 酒量りなしとムへども亂及をすかホイね嬢さまはか好  
 な漢學がたまはした

其四

紫檀の几は端路の硯の浅い分別賣家と書く唐様の習字

賣家で唐様で書く三代目吾れ先祖の大阪の草分代町年寄

も勤た家格や暖簾の古いを自慢して少しも新らしい思想なく商法の學問とツツ退け能く樂譜よ香茶湯歌俳借又圍碁双六と無用の遊藝にのみ身を凝し古書畫古器物の鑑定はすききも肝心商賣品の検査の出來ず藝妓や帶問を集めて戯謔の巧み云へども荷主や得意の應對の少も出來ず劇場や花街の事はは明るけれど時世の變遷の更に分らず錢を遣ふ事を知て錢を設くることを知らねを漸次お家産傾きて拾人兩替と誇りし家も一人の召仕を遣ふ事もならなくあま昔は西區の馬捨場と一口に言ひを置たる川口富島等それ他も御一新後店を開きたる會社商店等乃新米商家の勉強も段々おされて舊家豪商の只名のみみてむたもの衰へ行くのみ或の逼塞或は身代限と煙滅て迹なくな

る者さへいや多き中お大坂第一といはるゝ東區の内みて此行末の何と船場のド最中見のけ計りで家産を唐物明智恵も學問も中西のいお支那珍器屋是も昔の持丸燗者の一人もて尤も其名の聞わたる家格さすがお今にその名とりとて家屋の構造の京の東福寺の伽藍今焼失したれども宜しくといふ程手廣く住居奉公人も數多く召使へども御一新以來兎角も商法の損耗つゞき殊も近來の煎茶の廢れて支那風の事は何くれとなく評判悪れをいよく家産は傾くのぞ加之西區富島町の武力商某と淡河邊の洋酒を鬻ぐ一會社を借金の事より紛議を起し遂に利非を法律に訴へて敗を取り書入に爲したる地所を引上げられ其後も右の洋酒賣捌會社との其他に借金の云々ありて尙も爭論

の斷間さく夫是よて益々損耗成重ぬれども當主は女戸主にてお華と呼び元よ別ふ乏しき者なれを敢て家事を顧る心な之れつも昔の中西の身代の心よて潛上なる身に行む一人娘のおしんも母の所業を見習ひて琴よ三絃線よと只遊藝をのみ身の勤めどなく劇場に遊び花街よ狂ひいはん方なだ驕奢の振舞二十の上を四つ五つ過きとせ只專横を云む愚痴なることのみ拘泥て未定る婿もなく家の万事と老主管人の利兵衛佐兵衛も委任せあるが佐兵衛は正直なきども只頑固なるまとのみ言張て何彼もつけて因循の沙汰多く利兵衛は之に異て己が名の利成見るとよ明かなれば時世の變遷に能く心成用ひ只舊格古風の守りては遂に他の商人の爲に壓倒されんと頻ふ心を傷るもほ

から主人お華といむ同僚の佐兵衛まで更よその感玄のなけれバ己一人の思案めて洋酒會社を始発諸方の金の出入先を奔走して程好くなた店の商賣も心を用ひ内憂外患やも一身に擔任て能く辨へけれ中西の白鼠や評判高く聞えけり今日も店の結界の内坐を占て當座帳をつけ終り頻ふ主家の事お就て腦を碎いてゐる處へ這入り來りし一個の客人「モシ此花瓶は何語でおざりませ又例の悪直はお斷りです利兵中西の悪直と悪い習慣が通りものよ成て大きに商賣の妨害になりす以來は決して悪直の申しませんあらドウツ御愛顧を願ひはすといふ折あら鎮臺の號砲がズドンッラ鉄砲だ

其五

夜も寝ずに勉強て主家の爲に忠をつくす番頭の白鼠

先代清右衛門は物數奇よて唐木一式を以て建築おしたる  
 中西の家との奥座敷よて主管利兵衛はお華よ向ひ尊嬢のお  
 耳にタコの出來る計りが吾等の舌も固くなる程是迄度々  
 此意見をやしたれば今更云ふ迄をなげきども古い暖簾を  
 鼻に掛けて人を輕蔑す夫のとならず肝心の來客まで疎末  
 な扱ひ中西の店は横柄だの彼處れ店の者は因循たのと世  
 間一般の惡評立ち商況の不景氣よ加之へて一入垣つた店  
 の不繁昌昔は小商人と賤しめた富嶋の武力商花房の家よ  
 り多くの金子を借入る、計りの果こそその事の紛れより裁  
 判沙汰罰金まで取られた果敢ない始末是と申すも舊家自  
 慢全く時世の變遷よお心のつかぬおら起つた事今よお  
 店の仕方をお改め万事舊弊を改めるのみか尊嬢もお品行をね

正しなされ切て帳面の附上げぐらゐるえ自身お御檢査あそ  
 心をやるやう又れ娘さまおも御教訓をお加へあそ心を  
 つ迄を小兒のやうな所作をさせず一日も早く然るべき婿  
 君をお迎へなされ家事の取締を嚴重になされませ同じ東  
 區内の舊家中間で一番小さな家産を輕蔑められた本町の  
 水穂のお店の當家と違ひ御一新以來俄に店の仕方改替へ  
 舊家と長者とといふ由なき家格自慢は驕奢と共に斷然止  
 て主管手代丁稚はで上丁心を一ツおして頻よ商法に勉強  
 するおへ當家の爲おは仇をする彼の花房を始め洋酒會社  
 米會社の役員大東其他西區内で屈指の豪商等も吾を先に  
 お取引して盛んに商業を營まき殊よ一人娘のお菊さまも才  
 色共お勝をたお方此様やすと失敬あやうなれど此方のお



嬢さまとは雪と墨和漢の學問の其他お英佛獨の三學をも  
 修められ品行も極めて方正ければ東區内は評判娘若木の  
 勢ひで成長したれを男を及ぶ立派な器量日本の開明お  
 向つて大きな利益を與へ賢女良婦の名を揚らば歴史にそ  
 れ名を残されませう中西の家から水穂の家を見を別家  
 分家も齊しいものその水穂の家風を取れぬあを驕  
 慢た言語はお止せなされ元より御近所なり知合の中今  
 ら水穂の家を懇親を結び彼家の主管理の意見を開け一日  
 も早くお店の御改革をして此未共西區の新米商人も愚弄  
 にされぬやう御注意なせるが肝心若このまゝに因循なさ  
 らる遂に此中西の家人の物をいふ折柄店の小僧が走來  
 しまんお新聞を介さし出す繪入新聞ね華の見るより顔を

皺め妾の内はそんなものは嫌ひもゑ注文する筈はないよ  
 どいふ間又利兵衛の新聞を手取り是れ今日初刊の新聞  
 で無代進呈の印がなしてありますとやがて表面より中面  
 を諦め挿畫をいれ印刷といひ大層体裁の好い新聞紙讀で  
 見たら心をさぞ面白からうといひつゝ裏面の廣告欄内を眺  
 め頃來の追々新聞廣告の効能が世の人々貫徹したと見  
 て賣藥や書籍の告條のみでなく種々な商賣の廣告が出て  
 るお全欄見わたして大に驚き後室様彼の花房が  
 堂筋の天正の惣代理人をするといふ廣告が出てをりま  
 るお花「ナ」花房が天正のと思ひを顔を見合して互にホッ  
 を嘆息つきけり

其六 印度の昔の説教よ涙の珠を繰返す珠數商の法廷

此堂筋も年古く住ふ珠敷商は天野五兵衛商賣柄とて佛法  
 好た今日も例月の説教日法坐も果て同行が茶ノ子の馳走  
 に預りながら追従交際の難有法話△ヤレく難有やく  
 何と妙珍さん小松谷様の此説教の真に難有いではおさう  
 ませんか釋迦如來様が牛馬にさへ身を換て娑婆の往來八  
 千度難行苦行を遊むして佛法をね廣く下さきたそのか陰  
 で此日本へまで難有い教が傳はり吾々のやぎな無知愚痴  
 な凡夫さへ阿彌陀如來様のお慈悲に預り此様な尊い此説  
 教も聴けると云ふの○夫よつけても厭はしいのえ耶蘇教  
 といふ邪宗の流行見るも汚らはしい磔柱を拜ませて人は  
 血を流して死ぬのが本意の道お外れた教へを説き折角佛  
 法の難有い教へで千餘年來凝固つてゐる人の心を打碎し

果此日本國をしてやる目算とやら然し吾佛法の教へで  
 の虚無寂滅此世は假の世此身は假の身夢幻露電と説いた  
 まふそのをその假の世假の身は果敢ないもの、爲他國  
 の人々争ふは由なれと殊に忍辱和合と第一の要義惜い  
 欲いの塵の世は少しも早く脱離して清淨無垢の極樂淨土  
 へ成丈急いで往生し阿彌陀様や開山のお傍で快樂極  
 め長和に暮すが吾等の本願△長閑に暮すといへ此天野  
 のお内山先祖代々此本山のお出入五兵衛さんえ固く娘  
 のお竹さん迄揃ひも揃つた慈悲懸いれ方お商賣物の珠敷  
 の數百八煩惱のさらりと休て只々一心一向に後生の願ひ  
 の他になく大事な商賣事をも後廻しにして朝から晩まで  
 佛法三昧は目分違計りか此やうよ吾等までも呼集はて毎

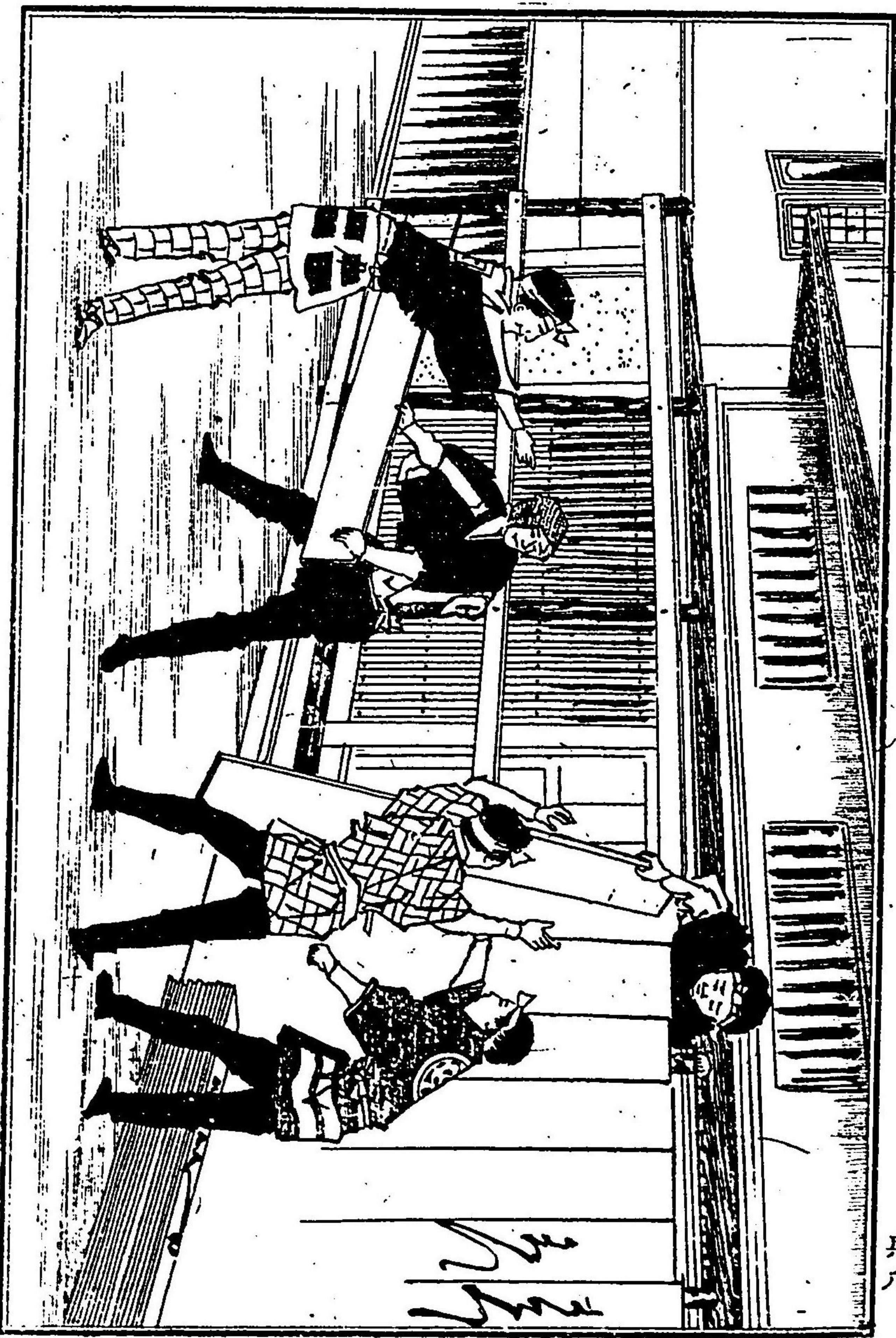
月屹度一回の二回か尊い説教を聴せて下さるといふて好いやら奇特と賞て真いやら太坂中の信心者夫も反對西區邊の一新以來の出来星商人が日本書と與へる邪宗を信じてイヤ實理だの發明の電信や汽船や鉄道と現世の事おのゝ屈宅して來世の事なぞい假も言す只利欲の事おかり云てをる王法佛法の兩賊といふもの然し西區の商人の中で花房さんなんぞ少しの後生の考へも有か方當家の事城を種々お世話をなささ娘のお竹様の事迄何彼と心を添登今度ハトウく惣理代人とやらをも務めらるゝどの事ア、いふ深切な方と親みを結ぶといふも如來様の引承せ何よつけても同行衆のりがたい者の如來様だのうと感喜の涙を噉とあぐれを一同そ

そ、ろふ隨喜までア、ありがたや、南無阿彌陀佛々々々  
**其七** 肝心の商賣は浮の空なる佛法狂ひ主人城見真似又番頭の似非説教  
 古語ハ曰之上好そととこ下おれよと甚たしきものあり  
 と天野の店はおのづから番頭小者よいたる迄上を見習ふ  
 佛狂む手代の正助は帳箱を机替り前おおき筆の軸よて  
 トンくと拍子木代りに打き立て聲もをかしき法談摸擬  
 正助コレ松藏おめしは松藏といふ自分の名の理を知てゐ  
 るか汝の名を松藏とつけたは旦那が深い思召の有ての  
 おと霜や雪を凌いで凋む後れ千年万年の縁を保つてい  
 ふ意味ではなく松柏碎けて薪とあるの比喩から出ぬ無常  
 の諷諭人の命は老少不定朝に紅顔あるも夕よ白骨となる  
 とは朝夕いたいと文さまでも辨へてをらねば成ぬよ今

朝を今朝とて珠數の數をば三浦の大助の年と間違へ百六  
 ツよむたは何れ魯鈍今この正助が小松谷様れは説教承  
 はつた事のある珠數の講釋を聞きてやるから恭しく聴問  
 しろそもく珠數の數の百八たる因由の七十二候も二十  
 四氣を合すれば則ち一百八となる此數を用ひて百八とい  
 定めたるものなり此を朝夕手首に掛て佛を拜し後生を願  
 ふばその功德廣大にして極樂往生さらく疑ひある可ら  
 す殊に當天野のお家の如きは皆難有い珠數を商ひ現世  
 を送り後世を助かるるとよく佛法も縁のあるお家その  
 商賣品の珠數の糸の縁に繋がる親類縁者出入の者まで濟  
 度して蓮の臺も乗らしてやらんと此正助が弗留那の辨舎  
 利弗の智を揮ふて説論れども傷まし哉一切衆生の井戸

へ落たる簪同様救はんすれども尙沈むの全く耶蘇宗の  
 爲み欺かれ且は現世の利欲も迷ふらのおと邪宗に迷ひ  
 す利欲も惑はず朝夕念佛稱名の課業も少しも怠らず只一  
 心一向の後生を願へば極樂往生の此正助が印紙を貼用し  
 て請合ものなり南無阿彌陀佛々々ホイ松藏め何時の間  
 にか遊て仕舞くさつぬエ、おんなことをいふてをられ  
 ぬ今日は惣代理人の花房の旦那がおいでになる日だから  
 店の掃除をせねばならぬ肝心の相方の松藏めも遊られ  
 れは雑巾が茶をさせることがならぬコレ松藏々々え  
 遊まへ行た松藏々々ハテ是程呼の又佛ども法ども言望の  
 は往生したか成佛したか何えどもあれうるさいもの座  
 の浮世垢の娑婆ていゝるぞいといひつゝ箒を採て店を掃

出いながら又を口癖に南無阿彌陀佛々々々々  
 其八 内輪の不如意を包まふとして却て身上の衰退を顯す天野の家の表圍  
 花房の手代新七が多勢の手傳ひを使ふて天野の店の半分  
 を板圍にしかけるてゐる所へ天野の手代正助は顔色變て  
 出來り正助「ナイ」花房のお手代新七さん此天野の家の  
 表圍の誰の許可を受て成されるのちやお前の主人花房  
 様當家の惣理代人の依頼したれと夫と主人と主人が怒  
 意上より親切づくで成立た話此天野の店の商賣の妨害に  
 なるやう表圍をしてくれとは頼みせ頼まれもしない答客  
 の出入の多い店先を板圍するとは無法千万假令主人が承  
 知しても此正助が黙止てをりませぬ夫とも達てや無理を  
 云さら恐ききがらと交番所へ出掛けても白い黒いをつけ



其八



て貰ふれぢや夫でせ強て圍ひをするのと腕をまくつて詰  
 寄すれと手代の少しも阿容たる色な之成程主人の話に違  
 のす道理も法律も分らぬと見ゆ理も正さず警察へ出ると  
 は前後分らぬ無茶なお手代此ぢいふお方が店を預りおと  
 はば老人と女子計りでの日に増し家業の淋しくある道理  
 コレお手代さんそんなに鬚と鼻を仰向けて憤怒である計  
 りが能でもあるまい夫より手近い今日の新聞の廣告欄内  
 をば覽きさい一旦主人と主人同士が惣理代人に成てくれ  
 オ、成せはせせと互み約束状を取替し立派に新聞紙に廣  
 告までするからいよしや私の主人が前主人の家蔵諸  
 道具賣拂ふても夫は惣理代人の権内にあること増て店  
 残半分板圍おする位ぬの朝飯前の茶の子同様家を殘らせ





應下オウ雅オチ小言コトゴトでもいふが好オキい 正助「イヤ何ナニといつても不承オモ  
 知チだ 新七「物理ウツリ代人ダイたる主人シヤウの命令メイレイお前達マエの故障コトワリは齒ハか立タ  
 ぬ田タ作サの齒ハぎしりは止トた 正助「イヤどすあつてもど角ツノ  
 目立メち互タに争アふその折セら履音フミ高タカく來キる 巡査ジュンサ 巡査「コ  
 リヤ 何ナニを高聲オウシヤウ又争論ソウロンをするのぢや 正助「へい此コノ無法者ムホフシャ  
 父チヤウが 新七「イヤ此野蠻人コノヤマンジンが 正助「ナニ野蠻人ヤマンジンとい 新七「人ヒト汲ヒ無法ムホフ  
 者モノ何ナニ何ナニれこと 正助「云イハたがどうした 新七「どうもかうも入イるものか 正助「  
 ナニ 新七「何ナニだど 正助「サマ 新七「此奴コノヤクめが 巡査「コリヤ 二人フタヒト々も静シま  
 いたせといひつゝ往來オウライの人立ヒトを拂ハラひ「コリヤ往來オウライせい」  
 其九 弱ヒヤクの肉ニクは強キヤウの食シキと云イへど一時ヒトトキ弱ヒヤクも強キヤウも勝カつ天野アミノと花房ハナボの手代テれ喧嘩ケンカ  
 花房ハナボの手代テ新七ニシチの手傳テ大工ダイクよ命令メイレイて家イ取ト拂ハラせ夫等ソノの  
 人々ヒトが歸カりぬる後ノチ尙ナも其處等ココを取片ト附ツけ空カラを諦視シめて獨ヒト

語頑固手代が邪魔を入ぬのて思ひの外も無益な暇入り冬の  
 の日と親の物にくそをなうてくれるとやら今大工手傳  
 らが行たと思ふたよモウ三星が東の空に現れた此様子で  
 見ると今打た學校の太鼓は九時を見ゆるあまり此身の歸  
 るに遅い故且那を定めては心配ドロそろくへ行はせ  
 うと行んとなしたるその折ら天野の切戸をソツと開け  
 顯れいでたる手代正助物をも言はず後ろの方より手に携  
 へぬる割木にて新七の頭をグハンの一撃思ひがけなき無  
 法の手向ひ此方はいかでか驚かさらん怒りの聲も高やか  
 ん新七「ヤア誰かと思へば天野の正助まだも野蠻に眠る覺  
 めす最前の争論も遺恨を抱き此亂暴を働か理の分らぬ  
 よも程れある正助又しても野蠻呼はり主人の更なる此正

助を後生願ひの信心者人を争うの佛家の訓懲と是迄辛抱  
 してゐれば汝の主人は能い氣も成り人を無けなる無禮の  
 舉動人れ身上を吾物顔に盜賊同様詐偽同前資本や商品を  
 自由おしぬ上家は打破したその返報汝の頭を打破して  
 怨みは十分一を晴してやるのだ新七「成程さう法律も道  
 理も少しを構ひぬ腕力談判夫程喧嘩が仕たいお心を臨  
 分相手おならぬでもな茶乳ども最前も最前とて巡査の説  
 論貴様はあきを何と聞た正助何と聞てを彼と聞ても巡査  
 の説諭位おみは構ひない何でも今晩は汝を打ち延して平  
 素の怨を晴すのだサア皆の者出て来い」と呼ぶる聲  
 に「ッ」と答へて豫て用意の小僧下部手にく得物を提げ  
 て「ハ」くく露れいで○主人の家を横領する花房の

悪漢の差圖被受け△吾儘を働く手代は新七□主人の家と  
 打破したやうな汝の頭も打破してやる○覺悟をしろと右  
 左ど一時よかれば多勢よ不勢よしも強氣の新七も防ぐ  
 に由なく手どめにさせ新七エ、残念や無念やと叫ぶ聲も  
 も苦痛の息切れ正助是丈打擲れば平素の遺恨の十分一位  
 むは晴したといふもの息の根止ては後日の妨害最す好い  
 加減よ勝間揚て△○□チット合點と一同おドッお計りお  
 高笑ひそのま、本宅へ引取たる跡又新七の息立つみ  
 由さへ遺憾し涙折るら此處へ花房の主もまど新七の歸り  
 の遅さに若間違ひでもど人力車で驅つ茶提燈の火あすか  
 して見て花房チ、新七の新七且那樣天野の手代お無休の  
 手おめ花房チ、皆までいふな呑こんだ汝の忠義の徒爾に

えせぬぞ必ず共々氣を確かよといひつゝ車夫と諸共々新  
 七を扶けて人力車に乗せそのまゝ天野の店の表に廻り雨  
 戸も破れよとドンくく「花房で座る急用があてはる  
 りました

其十

人の得意を吾物顔の鏡い爪で搔廻す鷲野の子分の木遣の稽故

大阪の船場の町の東堀土地の名さへ曲りどて直え行  
 評判男羽風も荒く嘴の爪も鏡に鷲野平五郎鷲人足の一個  
 の棟梁舊幕時代には手傳職の大工左官れ下よ就き同じ普  
 請方の其中で派振の利ぬ職柄なりしが一新以後の建築  
 請負業と名も呼變て大工左官石工屋根葺洗屋業は部下  
 よつ茶て四區十六郡又追々得意の敷を殖し大坂市中よ子  
 分子方れ住ざる町も仲間の内でも一と云れて二とは下ら

ぬ親方株の平五郎今日仲間の参會も出鬼の留主なる子の  
 分の雑談音頭の稽故もそつち退け熊此う吉やイ汝れ今晚  
 の聲の如何したのた八いつもの鹽辛聲も是を掛て焼原を  
 藥罐と云ふか豕れ遠吠と云ふか壁やうのない變痴奇な聲  
 だせ是はは何ぞ仔細があるだらう吉仔細も五さいもある  
 もれか昨夜松島で勉強が過たからよ熊フン人に言われぬ  
 先と思つて自ら名乗つて出やアがつたな權自首の件を以  
 て罪一等を減じて懲役十年中附寄るが聞て呆れらア松權  
 手前大分四角なまどを知てゐるの門前の小僧の習ぬ松  
 を讀む格で隣家の代言先生の言語を聞た覺ゆる八吉の松  
 島ぢやアねへが勉強と云ハ内の親方だ尙年は三十になる  
 かならずで是丈の棟梁に成たと云は全く自分の勉強あら

だ權夫のもう云迄もねへ事だがその勉強は一つの根が  
 あるが知てるるか松「ウンニヤ知らねへ熊どう云事だか話  
 して聞せねへな吉又いつも乃法螺ぢやア否だせ權法螺ぢ  
 やアねへ眞實正銘少しも紛むなしの話だ今から四代前の  
 平五郎棟梁と三十三で早死をされたがその死期も臨んで  
 息子の平五郎親方を始め多子分を枕頭も呼つ茶枯野乃  
 虫は聲細くではさい大幅な息をホット突つ嗚呼止なん天  
 なるかな命あるかな吾は遺傳も存するぞ八「チイ」權公  
 説教が演説か譯の分らないそんち奥齒のそづがゆく成る  
 言語の止了れ權オット東西交せる可らず熊汝が自分で  
 交せておいてお死やアがれ權これは閉口決して交せぬ  
 ろら神妙み聞なせへサテ棟梁の遺言に若己が長命をし

てゐるならば豫ての大望を必仕遂げ大阪中の普請方を悉  
 皆己の坤漢おして市中の勿論左方まであらゆる得意場を  
 造へ様ものを疾病と壽命おは勝れぬへ汝達は己の志しを  
 繼傳で勝手の悪い棟梁は出入場は金力で買取り強情を棟  
 梁の持場は腕力で奪取り一代で行ずば二代も三代を孫曾  
 孫玄孫の代迄も此二道を能く守り飽はで稼業に勉強して  
 必ず己の目的遂げるや寧ろ是さる仕遂て呉れば念佛讀經の  
 追善供養をして呉るより百層倍の佛事だからと言って置  
 し言葉を守り今の棟梁迄丁度四代金力と腕力で得意を廣  
 免トウく今では此勢を吉鷲の印絆天を見て何處の普請  
 方を恐れぬもれり一人もねるせ松「おまけみ今の棟梁は  
 年が若く男が好て金持で八「それで女が惚るなら仙臺伊達

の殿様が三浦屋の高尾を殺しやせぬかボカンく 權又八  
 の野郎め横助から飛出して話の腰城折てしほやアがつた  
 新聞なら以下次号と此處等で一段書切る處だが己等ハそ  
 こを一番チツ耐へて最う一くさりやらかすべいエヘン今  
 の棟梁は男が好うて金持でその上年が若くツて勉強と強  
 氣と金力と腕力まですべて先代先々代の棟梁より立増りか  
 負よ色事師まで一味加へて熊生薑一片水一杯半煎方常の  
 如しが權コソく又か止してくれ折角八の方へ鎮火口を  
 かけよ何思つたら又熊の方から火の手を揚やアがる松今  
 度は汝が悪いのだ何故と言て見や色事師まで一味加へて  
 と此う云だすと是非生薑一片と謂すんバある可らずだ 權  
 オヤ松はいつの間にか漢語を遣ふの 八「大方唐物町の中西

の娘が感化たのだらう吉娘と云は川向ふの水穂の娘のお  
 菊子も随分變りせのぢやねへか熊女のくせも琴三味線を  
 嫌つて英語だの佛語だのと何だの理の分らねへペロく  
 の勉強權一層と云え影とやら又例の陳腐漢を始めたせじん  
 ち事を言てるるれか少し静おして聞て見やうぢやアねへ  
 か一同「サノ好らうく」

其十一蟹の這ふ横文、眠のさらせども心の直な水穂の娘が洋學の勉強  
 才と色との両がら世に聞はたる水穂の娘お菊の今宵も川  
 沿ひの二階と書室も只一人机お對ひて夜學の勉強川向ふ  
 の鷺野の内の音頭も漸くは静お成り聞ゆるものゝ逝く水  
 の晝夜を兼ね音ばかり是から妾の勉強時や蘭燈の心をい  
 さ、か捻上げ又讀みさしの文明史を三行四行讀む折まも

紙障をソツとひき開きて徐々に入とくる乳母のおさんお三  
 お嬢様まだ御勉強で御坐りまするか餘り御勉強も度お過  
 るとお身体の毒みなるこのこと學問も智慧も命の保れば  
 まそ貴女も少し御保養を成されませお菊「ナ、お三お前が  
 例もの其親切切妻の親の様と思ふてをりまする學校の教師  
 様のお話よも教育に智育徳育體育の三ツがあつて智徳の  
 二ツの精神の教育又體育の運動養生人の身体を壯健よ  
 する教へ如何に精神の智徳が勝れたればとて肝心の身体  
 が虚弱を成り二十代や三十代で蚤死をしては何も成ら  
 ぬ維新前の日本も武藝が世に行はれ其武藝を本業とする  
 武家計りか百姓町人よせ自然其風が感染て劍術だの柔術  
 だのと稍体育と云ものがあつたが御一新後え武藝の廢れ

て地を拂ひ加之馬車や人力車が流行りだして歩く事さ  
 へ稀なれば上下一般押なべて運動は漸次少くなると体育  
 といふ事は全く絶たぬふやうな姿夫にひきかへ精神の  
 教育は洋學の緻密たものが盛んに行われ加之へ人間の交際  
 も農工商の業務を日増し月に添てむづかしくなる計り  
 夫故近頃日本人にと脳病だの肺病だの心經病だの種々  
 難治の疾病が多くなり兎角蚤死をする人が多い様子命が  
 物種とて野蠻な時代より世よ言ひ傳へぬ古い謠増して文  
 明の今日よ生るゝからは身體の尊い事を知らねば成らぬ  
 故昔の武藝よ似通ふたやうな事で衛生法よ害れ無い体育  
 を世よ行はねばならぬ次第増て女は悪い習慣も有て自と運  
 動を欠く者なれを尙更衛生に事よ注意せねば成らぬと時

々々難有ぬお教諭もる妾も成丈け精神の教育と身體の保養  
 の權衡を程好々せん的心得なれど汝も知ての通る水穂の  
 家先祖の代より此妾まで數代連綿の血統續き此大坂中且  
 ぞ稀なる家格是迄は肝心の米商も本家ではせず江戸堀の  
 出店へ計り任せておき番頭の徳助も万事任せ主人の只和  
 歌よ蹴鞠よと潜上の遊びにのみ耽つてゐたさよ妾の代に  
 成てゐらば時世を違へば主人が直接に商賣の掛引得意の  
 交際をせねばならぬ故女ながらも普通の學問を脩め歐州  
 風の商法を營ひやうよせんと思ふ計りよ此勉強然し成丈  
 け氣残つて度を過ぎぬやうする故おドツツ心配してた  
 せるなといふも優しき言づかひ心の實直も顯れて最愛ら  
 しくぞ見ぬにけるお三え尙も膝を進め夫の好いお心掛茶

貴女も夫程養生の事もお心がついて遊んで遊ばすなら妾  
 も大きよ安心致し升然し貴女が此う人よ優て文明開化ど  
 やらにお進み遊ばしましたも元はと云ば教師の雨森先生  
 のお蔭真よ彼のれ方は御親切なれ方雨森先生といへを貴  
 女の豫てのお話日本人は古來の習慣で早婚する悪い習慣  
 があつるのまた身体も調はず智識も熟さな内よ子を産そ  
 と其子の虚弱の云ふ迄も無く自然教育も不完全な理也  
 為世の文明進歩の爲よ大層な害を興へると雨森先生の  
 教諭也五五までと思ふが夫では餘り盛りが過ると親  
 類の者の意見もあをを二十三の春はでは婿は持ぬ婿を持  
 た上の尙身代の改革をするといれ話ですが只今のやうお  
 お身持で御勉強なををましたら二十三になる迄よは東區

丙で貴女の上を越す娘御一人もござりますまい其時の  
 事を想像ると嬉ふて〜乳母も何とやら鼻の高いやうな  
 心持夫につけても心よかゝるは川向ふの野の棟梁とい  
 かつ〜四邊を見廻してお三「貴女をどうか目懸てゐるやう  
 すと近處に人の専ら噂さお菊「夫が眞實なら畏らしい話だ  
 ねアノ棟梁は自分が威勢の好いの任せて義理にも法よ  
 も構はないでや〜つて相談でも仕か茶て來な茶れば好  
 どの評判ドウツ強迫けお相談でも仕か茶て來な茶れば好  
 いねへお三「貴女の仰しやる通りアノ棟梁のどらくお壓制  
 な眞似扱するので世間で彼是と悪くいふ計りか子分の内  
 にも不眠を云ものがあつて既に前方のその配下に就てゐ  
 乙も今ハ虚無僧イ、エあの尺八業とかいお者よ身を



變へ何でも棟梁も意趣を反すとか云て彼はその下拵へを  
 してゐるとやら夫と云もあんまり強い自慢が過るからの  
 ことお菊強いもの勝ち世の中も成丈向ふの無理を除  
 て通し相手にならぬやぢするが肝心ね三「夫は貴女の仰し  
 や依通り此間も鷲野の所有の隣空地お有た小さな石然  
 も其以前はお店のもれで有たお云のを持て来てお店の  
 地面の地境も置いてあつた大きお捨石と交換て呉ると無理  
 な相談若否だと云たら例の暴逆子分子方を寄越してどの  
 様お亂暴な事を仕やうも知れねばお前の御無理の御尤と  
 向ふの言状通を替てやつたとお手代衆が妾へお話お菊世  
 の諭ももう乞食と棒打とやら成丈苦情を造らへぬが好い  
 夫も附ても今ね前のお話の妾への悪想一條夫が眞實なら



變へ何でも棟梁も意趣を反すとか云て彼はその下拵へを  
 してゐるとやら夫と云もあんまり強い自慢が過るからの  
 ことお菊強いもの勝あ世の中も成丈常向ふの無理を除  
 て通し相手にならぬやぢするが肝心ね三夫は貴女の仰し  
 や依通り此間も鷲野の所有の隣の空地も有た小さな石然  
 も其以前はお店のもれで有た云のを持て来てお店の  
 地面の地境も置てあつた大きき捨石と交換て呉ると無理  
 な相談若否だと云たら例の暴逆子分子方を寄越してどの  
 様も亂暴な事を仕やうも知れねばお前の御無理の御尤と  
 向ふの言状通を替てやつたとお手代衆が妾へお話お菊世  
 の諭ももう乞食と棒打とやら成丈苦情を造らへぬが好い  
 夫も附ても今ね前のお話の妾への懸想一條夫が眞實なら



實に氣味が悪いねへト語ふ折柄水に響きて又も聞ゆる川向  
かの熱野の子分の木道の稽古ヤンソ引けくヤア一いれ三「エ、  
吃驚した

其十二 其争ひは君子みあらぬ丁稚同士の喧嘩も開進と頑固の異見の軋轢  
近來尤就中縦覧人の多くなりし博物場の賣品室よて第一  
等の位置を占たる中西の支那品店のすぐ隣りよ小さな茶  
店も世間并に店を張つたる朝川の籠甲店へ忙しうさうさ道  
て來りし水穂の丁稚進吉「モシお店よ東髪留ははさいはせ  
んか内のお嬢様がお指し了なるれですがと云はれて店番  
をしてを望し朝川の丁稚の頭を搔た寛太「私の店よ東髪  
留のござりませんか前も知ての通り若旦那が當世好で  
いふ品は成丈け仕入れておくと仰しやるのを親旦那の大

の舊弊家でまだチヨン鬚戎職てゐるやうな始末もゑ東髪  
 どころか東京風の鬚へ大嫌ひ賣店中が持たしてゐ  
 るのさといふ横合よ一人の丁稚長次只親旦那の舊弊家  
 な計りでは無いといひつ、隣りれ中西の店又指をさし小  
 聲み成りて顔をしのめ實は彼處の店で時々家事向世話  
 になるので彼處の店で本家顔を振廻し兎角己が店の頑  
 固風流此方れ店へも吹せるもゑ流行物の仕入なごのど  
 しても出来ないので進吉夫は眞實に困つゑものだ結さず  
 舊弊頑固の寄合で自然商賣を衰微になる譯大さにお世  
 話だがお氣の毒お次第だと三人が密々語ふ折しを浮羅々  
 々来るゝる一個の職人寛太長次の兩人の夫と見るより笑  
 ひを含と寛太「ナ、噂をすまば影とやら評判は頑固野郎下

職の鉄藏が遣て来た一番彼奴を愚弄て怒らせてやらう長  
 次「ソイツハ面白狸の腹鼓だ然し水穂の進吉さん万一喧嘩  
 にでも成て傍杖を打れるや行ませんから中西の店の方へ  
 寄てゐてくれくんさい進吉喧嘩のお相伴を喰て溜るものゝ  
 そんなら此方寄て高見で見物だや中西の店の方へ依る  
 間もなく鉄藏は一杯機嫌朝川の店へ腰を掛け鉄藏モシ寛  
 太さんよ長次さん何故此頃の仕事させておくんささら  
 ねへのだ寛太「させないと云のでない全く仕事か暇なのだ  
 長次「只さへ暇な處へ東京の新聞よ東髪の記事を書て教  
 唆るもんだから尙不の字を添るのだ鐵藏「ナニあんな事位  
 が不の字を添るものゝとやら新聞よ東髪をして日  
 本服を被てゐる女は舊同様たと書ておつゑが眞にあの通

東京の急進家又一一人や二人はあんな結髪をするもの  
 があるかも知らねへが大阪の間人そんな急進家の  
 ましたくてもありはすめへ寛太處があるから仕方があ  
 現在よりよめる進吉さんの御主人川向ふの水穂のお嬢さ  
 んなんどえ大の西洋好で今も今とてその束髪留を買  
 寄來しなつた處だ鐵藏アノお菊の急進家かあんな奴が束  
 髪に結ぬ處が誰が真似をするものがあるものか長次コ  
 鐵藏何をいふか出入先のお嬢さんの事をあんな奴と  
 は鐵藏束髪なんぞしやアがる阿魔のあんな奴のそてれい  
 て馬鹿と云ふが發狂と云ふが構ふことがあるものか寛太  
 さういふ貴様馬鹿と發狂だ鐵藏ナニ己を馬鹿だと寛太  
 ナ、馬鹿を馬鹿といつたがどうした鐵藏どうせねへか

うずるのだと打てかゝれば此方も負ぬ氣長次どもく力  
 を併せ一人の鐵藏を右左り打つ擲れつ不慮の闘争隣店の  
 中西の手代に此体見るより例れ得意に關涉主義本家摸擬  
 で中裁するかと思ひの外なる亂暴狼藉矢庭に傍に見てゐ  
 る水穂の丁稚の頭を一つ喰ひする是を相圖に寛太長次鉄  
 藏までが喧嘩を止め突然進吉に打てかゝりアヤヤといふ  
 間も荒々しき三人が手込に進吉は大地へ堂と倒れしが同  
 室内に居合せたる店番縦覽人諸共此時漸く走寄て四人  
 を左右お引分けり

**其十三** 蝸牛の角芽立ある争論も互ひの胸に堪忍丸を収まる鉢巻の脱売  
 家資分散の証文の朱書も赤く財産公賣の點數は塗札に白  
 く免許代言の風呂敷は多く紫にて三百代人の肌衣と大低

鼠色に化し被告れ病症は毎も痾氣又決り調査にある所有  
 品の悉く他人よりの借物富んどすれを仁ならずと店賃請  
 求の酷なるを罵る儒者あきば本來無一物と悟りを開いて  
 身代限りを屍とも思ひは禪僧あり千差万別雨霰雪や氷と  
 隔つれど落れば同じ谷川の水其谷の字の訓もあるキハマ  
 ル處は約定齟齬權利を争ひ義務を責め互お戦はず舌の鋒  
 口よと打出す鉄砲又傍聴れ臆を寒おらし免鏢城削とし敵  
 味方も一朝和を議し訟を解ば原被両造一床几曲直正邪を  
 争ひて四角張たる眼を口も和解て丸き塗盆の一ツ土瓶の  
 茶を汲て茶碗を譲る人民扣所今日土曜日にて新訴も少く  
 不参届や喚出し願も毎より早く事濟て思ひくくに人は散  
 りやう花落て訟庭閑なりと詩に詠じたる面影ある午前十

時三十分頃腰掛け隅に腰を掛たる原被二人の手代と代人  
 手代は本町の米穀商水穂屋の忠七代人の唐物町支那珍器  
 商中西の仁助對決前又解訴状を上げ出門の届札も捺印を  
 待つし話す談も平穩又仁助水穂屋さんの方で穩和よお掛  
 合ひ下されたものだから今回も事件も平和に事濟よなり  
 店の者も一同喜んで残ります忠七「コレハ」お言葉で痛  
 め入ります畢竟争論れ裁判れといふ事は互お心の置き處  
 の悪いから起つた事強てお席を願つて互又法理と争ひよ  
 しや下店の方を勝利を占て損害の要償をお貰ひしした處  
 が到底入費倒れで諺お云ふ算用合て錢足せす仁助貴店  
 の方さへ左様おれを増て下店の方に否やいござりおせん  
 只今卿のお説の通り万一勝訴に成て損害金を出さすにす

んでも夫迄の訴訟入費に損害金の上を越す出金のあるは  
 知たあと忠七「夫として他よ何が止と得ない事であらう店  
 の暖簾は拘はると云やうな事なれを假令身代を入費に入  
 てを白い黒いを分る迄法理に訴へねば成らぬなれと云が  
 朝川の手代と當方の雇人と何か談判をしていた際と隣り  
 に座つた貴家のお店のお手代が仁助「サア一緒に手出し  
 を致した段は重々恐入りましたが實此様な紛紜の起ると  
 も元はと云バ朝川の頑固隠居が平素示しが好ないからの  
 事「後隠居を店へ呼つけ糾明さす為迄の二階住居下店で  
 彼是朝川の世話を致すも舊來の交際忠七「種々に配慮の甲  
 斐があつて無異に納と連累の朝川の店を大慶び仁助「是と  
 了すも佛蘭酒製造會社と地面の貸借はの非常の悶着訴訟

入費も大金を失む懲々してゐる折柄といふ貴家のお店の  
 事な好みなさらぬ寛仁大度のお考るのお蔭忠七「時お書  
 面を出してから最々餘程になりますが出門届を督促させ  
 うると話す折「折ら折木カチ「仁助「最う掛官のお退散の  
 時間一寸受附で尋ねませう忠七「左様ならば一所に仁助「  
 ナイ履物はいの二番

**其十四** 智力と金力とお逼塞られたる天野親子が裏屋の愁嘆

旅も病で夢は枯野を驅めぐりと未後の一句を世に遣せし  
 俳師芭蕉の終焉の地に堂裏の花屋裏へ浮世の旅の疲勞足  
 四百四病のその外の疾病も責られ身代ハ漸次お瘦て左前  
 本宅を右に曲りたる抱屋敷に借宅も逼塞なしとる天野五  
 兵衛此世を吾世と深暉し昨日は花は今日の夢桐の一葉も

秋立て地券一枚散初しより有るど有らゆる千草百木公債  
 証書株券貯金漸次々々に枯渇み果て家屋さへ宅地さるる恐  
 皆人の所有となり器具を一ツ二ツ賣り遂に土蔵へ伽藍  
 堂手代丁稚お下女下男まで追々暇を遣はして今の親子お  
 下婢一人大きな家に住むも無益と此家へ移りて無業活計  
 五兵衛も今の世の望と共々頭髪を剪すて娘れ竹を名  
 前人自己の頼て土となる身と觀念めその名さへ土齋と呼  
 替へ平生好める佛いちりを身け勤め物理代人の権内とて  
 人の家宅に板圍ぬせし花房國三が理不盡も今の却て先見  
 と世間の人よ褒らるる哀れ果敢なきその体裁頃しも水  
 無月中旬にて本年は例より特別耐ぬ暑さの午後おる娘  
 お竹の最寄の浴場にて一汗流して歸り來り視のまゝ團扇

遣ひ安息香を薫らして坐禪を組たる父に向ひお竹「暑  
 い」此家の大陽が真正面に刺すから熱くて耐らないと  
 云ば土齋はうち點頭き五兵衛「表通里の本宅の裏屋住居の差  
 違へぬれで先祖の代から此地の居附き本宅も此扣屋も熱  
 い住居に變りぬれ無れど本宅の廣いもある少しは此處よと凌  
 き好つた夫お附ても思ひ出す手代正助が前後見す花房の  
 手代新七扱打擲しぬが原因となりアノ花房氏より嚴しい  
 談判素より天野の家の物理代を任したから何事も總て  
 アノ人の心任せとう仕られても仕方がない筈夫をどやの  
 う故障を云たは元より此方の無びなるよ其上無法のうち  
 打擲然も其疵が病むの根に成て花房の手代に到頭病死若  
 之を表沙汰にした時よの毆打創傷死に抵るとやら六かし



い法律に當られて正助は更なり主人の己も致唆お落て重  
 禁錮とやらにも成るべき處をやさく頼んで内濟私和是  
 のら家事おは口を入ぬと殿しい謝罪状を入れて此身の隠居  
 家名の汝ふ切替て地面居宅借屋はで花房へ托して此處を  
 逼塞今でい眞のあてがひ扶持親子が其日を送る計り是と  
 云のも其原は吾等を始め手代小者まで文明といふ事をは  
 少しを知らず只々佛法よのみ凝固り無念無想してゐる身の  
 罪科自業自得とは諦免てゐれどつひ妄想から愚痴が出る  
 汗々南無阿彌陀佛々々々々竹又お老爺の愚痴とね念佛が  
 始まつた時世時節あら仕方がない始めて花房さんと取引  
 の時一時の融通にさし支へ地券一枚書入れて百圓借たが縁  
 の糸夫のら漸々百二百果は千圓五百圓と借る度おと此方

の權利を向ふに取らきてとゞの到底惣理代人の名を占ら  
 れ今では天野の家名家督も人の物やら吾物やら理の分ら  
 ぬ果敢ない始末是と云のも阿爺の過失平素信心してゐる  
 阿彌陀様お釋迦如來も聞ぬ始末お言つゝ路次口うち諦  
 視免五兵、呼ぶより誘れとやら花房さんが路次口で今  
 人車から下ることろチイお竹や着物を早く持て来ておく

其十五

水揚仲士が烟艸休に烟よひおしい浮世雑談

千代万世水を潤せで一系よ流れを清き東堀家の名に負ふ  
 米問屋水穂の家の蔵へ数千の俵を上荷船より水揚を爲  
 す米仲士が煙草一休の江湖雑談○此店の仕事をして此店  
 の事を賞めるのは何だか胡麻をするやうに聞ゆるが此水

穂のお店の近年までの東區の内でもこゝろは西區の方など  
 での餘り人々を知らざるつたが△僅か此十八九年でメ  
 キ／＼と見上げる計りお身上を仕揚げ今では此廣い東區  
 の内でも一々言きて二とは下らぬ主管手代の骨折は元よ  
 りいふも更あがら一つの當主のお嬢さんが文明開化にお  
 氣がつかきて商業もお店の仕方も改められ何彼も勉強を  
 なされたからの事□是まで東區で中西と朝川翁屋の三軒  
 の其他は西區で紅粉屋の茂平さん計り舊來の取引とて交  
 際ふてゐたが今では教師の兩森さんが親切の説諭で手を  
 廣げ西區の烈しい商人共とも取引さして漸次稼業も繁  
 昌なして商標の記號の日の出の勢はひ○夫も引返へ同宏  
 區内で舊いた店の取引先唐物町の中西の家をどの家格自

慢で威張てゐるが内々その内幕を聞合して見るや暖簾の  
 古いが持主は是迄度々變つてゐて平の中西の家名計り  
 それで舊家だ大家だと朝川や翁屋を分家扱ひ△どころが  
 此のお店と翁屋といふ全く本家分家縁故のあるので翁屋は  
 當主の猶吉さんが若輩者もる營業が出来ぬとお店を頼ん  
 で仕方の改革餘議なくれ店で万事を擔任者今では手代が  
 勤番持□夫を中西の番頭が根も持て此間も博覧場でお店  
 れ進吉さんを朝川の丁稚と手を組んで打ち打擲此前も大半  
 一件でお店の大番頭アノ利兵衛さんと談判され内濟金迄  
 取れた癖も性懲りない此度の亂暴○既も裁判沙汰もせな  
 る所をれ店の支配人が平和しいので漸う是も示談の相  
 談中西々々と威張てゐるが其内証は左前西區の出来星商

人に借が出来たといふ人の噂△やがては堂筋の天野と同様始  
 めの新平民と同じやうに否がつてゐた花房やアノ大東の  
 俄富限お身代を残りすしてやられお氣の毒な姿おなるだ  
 らふ□チ、お氣の毒といへむ向ふの方から其お氣の毒が  
 あるいて来た○ナニお氣の毒があるいて来たとい□お氣  
 の毒とは向ふの方から△傘で日を除けて来るアノ娘が□  
 ム、アノ娘サアノ娘は今噂をしてゐたは堂筋の天野の娘  
 だ□ナニアノ十錢も宜しきといふ造への娘が△名高い珠  
 敷屋の娘のお竹だと虚をいふにも程があるせ□イヤ虚で  
 えかゝ今での後見の花房の妾をしてゐると近處の噂□後  
 見のうしろ見をするものだと思つたら前まで見るとい大  
 笑ひだ○家事向に万端を委任したと聞ふも三年立つか

立なれ内お大方花房の者よなるだらふと世間の人が言て  
 るたが實にその通りに成果た揚句の果よ娘まで委して仕  
 舞へば世話のねへと談話中央へ天野の娘多くの仲士が高  
 聲に吾名を云ふよ氣愧かし之水穂の店の本宅の格子の方  
 へ身残寄てこそく通るその折から娘お菊は何氣なく窓  
 の障子を細目よ明茶表を諦視めて圖らずもお竹と顔を見  
 合すればお竹のハツ傘に顔藏くして過る後姿見送り  
 ながらホット嘆息お菊アノハ天野のお竹さん一ツ稽古所  
 へ行た時よは妾が知らぬ琴の手を教へて貰ふた事も有た  
 んアノ見すばらしい今のお形仲士の悪口が知らねと花  
 房の妾をしてゐるの密賣淫をしてゐると聞くも憐れな  
 お身の上お氣の毒ども不便ども言はふやうない不幸薄命

どうの救ふて上たいもの夫ふつ茶ても世の謎人の振見て  
 吾身とやらア、油断のならぬ世の中ぢやなア  
**其十六** 昔の愚痴を繰返す珠数商の主人が玉の涙

ながららへばはたこのおろや忍をれんうしと見し世ぞ今  
 戀しき昨日の榮華は今日の夢名のみは華美な花屋裏も浮  
 世をかこつ天野の親子さらでも恨むさ世帯も涙を添ふ  
 る夕蚊遣と煙りをわふく澁團扇それさへ破れて骨のみな  
 る腕をながめて夏瘦と答へて後は涙かな古人の發句も身  
 んしみてお竹え捨いろにうるみ壁アノお父せん此間花房  
 さんがおいでの時又一條起つた百五十圓の預り金の嚴し  
 い催促出来ない中から工風して無理に五十圓だけ調達し  
 て渡した跡は殘金百圓明日限を當の無い約束だ茶の當



座免れ然し何どの卿の胸よお金の出来る工風のあるのか  
 妾は眞お氣がくまなど言へば土齋の手拭にて額の汗をれ  
 し拭ひ私ぢやかちとてどういふ考へもなげきども全体彼  
 の金は正助が甘々花房の辨法へに欺かれ封印のまゝで  
 使用せぬ預り証文の入れてあきば此一件のまは物理代  
 任せて置く事出来ぬ次第まかり間違つて預り主の松野  
 どのが檢事へ告訴でもしられた時え委託品使用をやらぬ  
 ふ法律お當られ身代限りではすまぬ一件夫故是が非でも  
 金策して屹度お渡し申しまするお花房さんへ殿しい約束  
 をもしたといふもの汝も知つての通りの今の手許七處借  
 てやうく二十圓その餘はなけなじれ衣類諸道具隠らぬ  
 典物して三十圓併せて五十のつばは免張合して渡した跡の

百圓なればとて工面が出来ぬれども然うともいへぬ  
 心據ころあく延た日限を最う一日ほんまり氣を揉で精神  
 に麻痺が來たやら茫然して今では心配も何處へいつた  
 やきなお竹「サアその預金主も能く聞ば矢張り花房さんの  
 縁家ややらで花房さんさへ骨折る氣すら如何とも談話の  
 つく様子夫を却て當方よ向む代言口調の嚴しい催促然し  
 魚心に水情と妾よ向つて猥褻らしい妾よなるなら己が手  
 許から殘金百圓をば償ふた上よ阿爺も生涯不自由なく世  
 話して遣うとをかしな相談劇場淨留里物の本おと家と親  
 どの二つの爲みの娼妓よ身を賣の例をゆれをいつそ花房  
 さんの言状通をいふ城打消し土齋の嘆息土齋その心志  
 の嬉しい等れども此東區でも舊家大家の五本の指とまで

數へらきた此天野の家の一入娘を金の償ひ方よ妾をさせ  
 て先先祖と暖簾へ土齋がすまぬれ竹元より妾も仕たくの  
 ないがお前がいかにも最愛しいのら昨日も昨日で反古の  
 中ら銀行の當坐預けの二百圓の受取券を見だした時か  
 前が涙ながらの一人語若此二百圓を預寄てれいぬら今度  
 の一件の百五十圓をすましたそれ殘額でお竹の益着の質  
 受して先祖の佛事も勤めやうものとおいひなされた縁言  
 を晝寝した顔で聞てゐた妾の心の中その切なさ胸を裂  
 さるるかと思ひましたお竹と計りお泣入れバ土齋のあ  
 いて脊を撫で土齋今日はいつもと譯がらがひ愚痴な己  
 より汝が愁嘆己お涙を落させるア、思ふまい嘆をまぬ南  
 無阿彌陀佛々々といふにれ竹之顔を上げお竹「サ、泣いて

ある間も気がしりな父さん花房さんへ何ていつてやりませせ土齋、端書でも遣つて此方から断りよ行くやしやう然し一錢あるの知らん確の天保錢が一枚佛櫃の抽斗よあつた筈だが二厘足なには困つたものだといふ折のら晚風が軒端お音信て釣と下げたる風鈴が鏘然お竹お父さんソレ彼處に二厘錢が

其十七

夜店歸りの白雨々に降つ湧たる水穂の娘の不時の災難

残暑を洗ふ白雨よ夜店も人も散果て僅お残る植木商の店さへ今跡も無く軒端を傳ふ雨滴のしぶきを除て佇立む女の水穂の娘のお菊と乳母お菊の乳母を見返りてお菊何故長松の飯つて來ぬだらう乳母定めて今夜の白雨で夜店崩れの大雑踏く人力車がないので探してをるのでおざりま

せうと話す折から内平野町の神明前を東の方より出て來しの大形の浴衣に三尺帯牛肉店の貸提燈を携たるの問ねど知るき防火丁夫姿普請場調子の高話此間の火事のボヤで濟さうと思つて骨を折たがトンダ大事おしてしまつさうよアノ時己等の纏を持って火元の隣家の屋根よ居たが唧筒の先が面の正面に當たものだから痛々つて耐らあかつた己等の又右隣家の内の大黒柱へ斧残入よ這入て痛い目よ逢た痛い目と云むアノ時も消口より四五軒も先の内へ斧を入た奴が有たの入らきた内おそ大迷惑彼云も鍛治屋の手間取やら桶屋の職人が防火丁に成てゐるからよ夫だのらゲンヤンと鳴ると小林の隊長や淺野の親方の火のやうに成て氣を揉そが實お尤そな理だと言つゝ歩と來

りて軒下お佇立むお菊と乳母を提燈の火にする一見て何  
 の互ひお點首さ合むモッレ嬢せんお傘がなければ此中へ  
 お這入んあさい私等がお店までお送り申しませうと言れ  
 て乳母の薄氣味悪く乳母「ハイ難有ぞござりますすが今丁稚  
 が車夫を呼にまゐりませたから追つけ連れてまゐりませう  
 どのふ間に二人は尙も摺寄りナニは遠慮には及びません  
 サアは一處にお伴いたしやせうとお菊の手を取り引寄す  
 るその手を菊と振る拂ひお菊「ナニは遠慮は申しません  
 が卿等も送つて頂く理がありますせんら云を鏡とき言  
 語の調子平常雄々しき性質とてゐる時に尋常の娘お  
 異なる身の動作二人の男え右左り理を糸瓜も入るものか  
 此ういひ出したら是が非で己等二人が連れて行と云つゝ

一人が抱きすくめ一人の肩なる手拭よて聲立てさせじと  
 猿轡「ア、泥坊、泥坊、乳母お何が紐るを丁と突飛し既と遊んど  
 する處へ雨傘二本を手も持て水穂の丁稚長松の花房の手  
 代と二人連れ長松「今夜の俄雨で人力車の種切れ大さお困つ  
 てゐる折柄幸ひ卿様にお目も悪り通運會社で此通を傘の  
 二本も借つていたさい眞と僥倖を致しましたと言つゝ何の  
 心もなぞ來かゝる向ふの軒下より二人の火丁はお菊を抱  
 き驅出る途端に衝突り互に吃驚た火丁「抱き  
 しれ菊を放ま花房の手代は手も持たる提燈落して四邊の  
 暗黒長松「お乳母とん乳母「ナ、長松とんの長松「お嬢様、乳  
 母「今泥坊が手代「ナニ泥坊がと云つゝも互も探るその折か  
 ら雨休と雲の絶間とりやゝ漏れいづる月影お菊に乳母

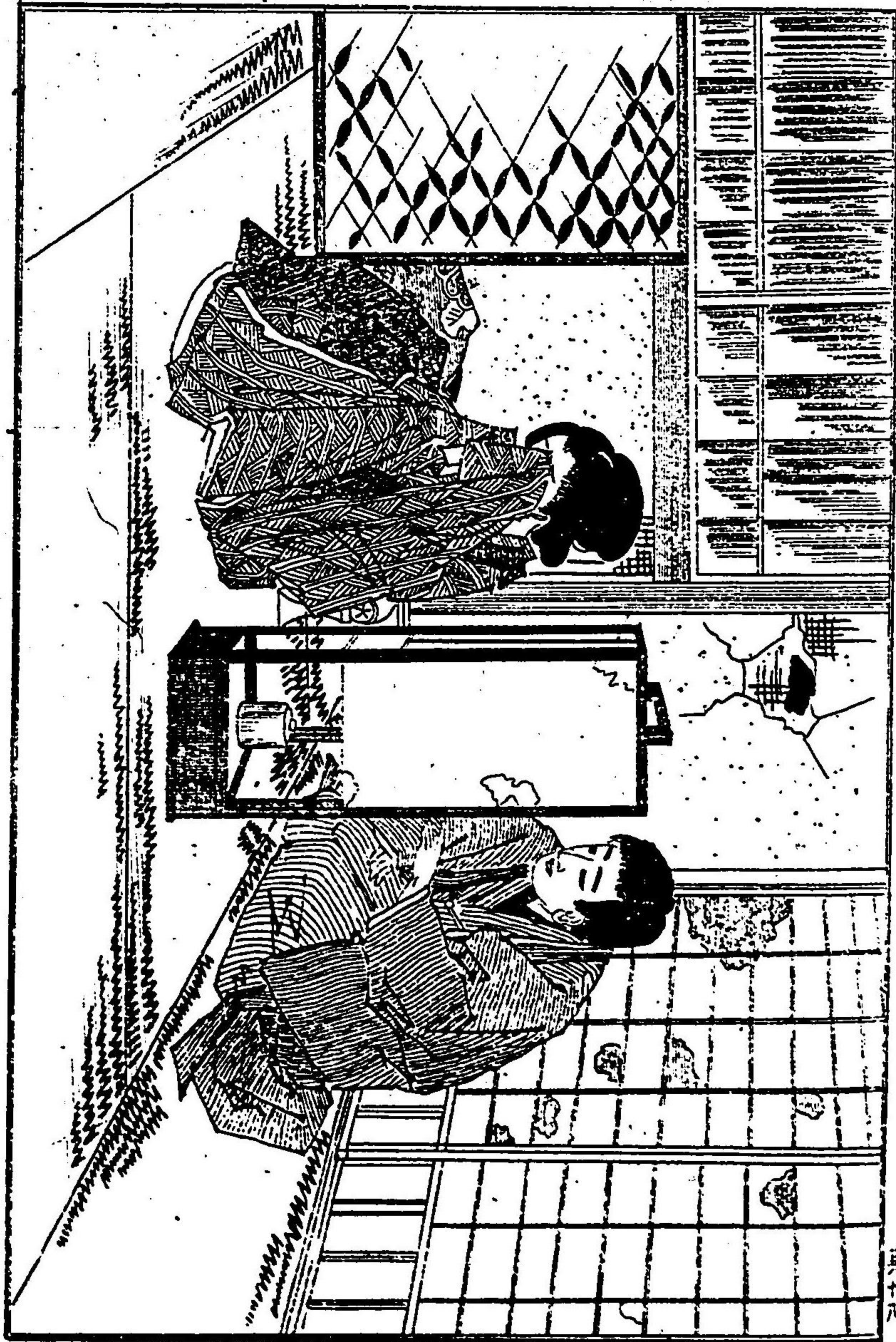


と下稚の長松手代も俱々顔見合せヲ、と驚く聲方早く横  
 町指して逃行く二人「オノレ泥舟と花房の手代は逃行くそ  
 の足お觸りし木札と手に取上げ月の光をよするして見て  
 内本町橋詰町建築請負業野平五郎配下職人一人と談終  
 つて小首を傾け「ハテナ

其十八

父母のかりれとて一も鳥羽玉の夜道お濡る情の切實

あゝく〜と日につれなくも秋の山いつしか暮て足元も小  
 暗くなるとし黄昏時瓦屋橋を急促と西へ渡るは唐物町の中  
 西の手代文七東へ渡る一個の男と行違ひさま詞をかけ文  
 七「チ、久藏さんでないか久藏「チ、さう云は文七さん大  
 層遅く成たなア文七「貴公も知ての通り天王寺の勘解の難  
 波村と高津新地と長町といふ御難れ場所を扣へてゐるか



ら損料蒲團や人力車の輪代の滞はりも云やうな屍録勸解  
 が多い處へドゥセ此方の不調よして本訴を受た揚句の果  
 て六十日の猶豫のある内控訴へはでも持出して其内は何  
 かか手段をつける目的だから其時の苦情は種にと知つ  
 故と無理致云ゆる係官も憎しむが濟で腰掛へ返つて見  
 最終も廻はされぬからやうく事が濟で腰掛へ返つて見  
 ると辨當屋の履物を併べてとうに返つて仕舞ひ丸で閑子  
 鳥で毛啼さうな景色時計を見れを五時さがり時に今日の  
 中の賑や土佐堀はどう云模様であつたの知ん久藏確乎は  
 聞ぬ茶れを始審の方はお掛りが急病で出勤が無く追  
 てどの事で下らたといふ噂又控訴の方は原告が洋人介  
 來てゐるので如何も免許代官の法尾律三君でも少し手子



胆を潰した自己は汝等と遊ぶやうな者でいなぬ云つゝその手を振り拂ひ五歩六歩足早に行き過ぎながら獨言文七「此處等へ淫賣の出やうとは今日の今迄知らなんだ昨夜千日前で二十人餘り拘引れたといふ噂を先刻腰掛でしてゐたものが有たが夫で此邊へ巢を變たか知らんといひつて腰乃周圍を探つてハツト驚きホイ矢立が無いア、失敗ぬぬいむのう後二歩三歩戻る向ふへ以前の娘矢立を物ではと差いだすを受取てハイ是は憚りさまと一禮述る其處をガラ／＼驅來る腕車の提燈の火に顔見合せ文七「娘、ナヤ」瓦屋町は何番地あやしの路地の裏長屋井戸に向む厠屋の隣り下よの猫と老婆一人四疊の二階四方壁簾子

と反古の打附け張り油煙も煤びし丸行燈の故どがましく薄闇く敷て巻りし敷き蒲團の傍も手を組み坐しは彼の中西れ手代の文七泣居る娘を慰さめながらお竹さんそんなおれ泣き遊をして下れ老婆が聞き耳たてチツと氣取るといふ事ませんからもぎ／＼泣くのは止めあそをせ只今のお話で貴卿のお身の上れ委細の事が分りました實は最前人力車れ提燈の火で圖らずも貴卿のお顔を見た時は餘ほりの事に膽が潰れて貴卿のお驚きと此文七が逃やうとまで思ふたをらる是迄世間の評判も天野の家は花房も押領され嬢さんまでが花房の妻も成てお出だどと度々耳も聞だましたが御隠居様と貴卿のお扶持方の御隠居の名前の時分に手代の正助が法律も背いた證書を入れて御隠居

り内証で花房も幾許は借財にしてあつた故夫を返済の爲  
 め月賦の代りも果は僅かの扶持方まで取上られ今で日  
 の活計も出来ない處必らず御隠居の前をバ程好々言ひ做  
 し毎晩内を出て淺麻しい此稼業をなさるゝとい夢にも知  
 らない事で有ましぬお竹家の活計と父上の病氣の手當に  
 事を欠き夜業仕事も或茶商へ茶撰に雇はるゝと程好くつ  
 くるご毎日薄暮ら家を出て此處等邊へ立ち君の往來の  
 人の袂を曳き僅か十錢二十錢の心よあらぬ情の切實文七  
 私がほだ白雲頭の丁稚の時内のお嬢さんのお伴をして稽  
 故屋通ひ其頃貴女は下女をお伴し連れ同し師匠へ琴のお  
 稽古れ目よ懸つた事もあつたに世の變遷とといひながら  
 政府の制禁の密賣淫賤しい稼業をなさるゝといひながら

やうよ思はれますお竹是も綺麗な身体ならを此いふ氣よ  
 もならぬな色ど花房さんの壓制で一旦妾になり下り人よ  
 も彼是言れよ身体濡ぬ内よ露をも厭へ濡て雨をも何の  
 それと精一杯又奮發して思ひ切ぬる此働き文七御奮發も  
 事よ因る何の是が働ぎと言れませす既に故人の歌よもあ  
 る通りかばかりの事の浮世の習ひぞと許す心の果ど悲さ  
 どやら濡ぬ先こそ露をも厭へだの一寸切られるも二寸切  
 られるを同じ事だのと悪い事をする口實の種に世間の人  
 が能く口癖よいふ事だがアレの大に命のない悪は小さき  
 疵から療治も叶へど二尺は疵では命のない悪は小さき  
 作す莫れといふ古人の訓誡さへあるものをたとへ僅  
 の過ちでも過ちと知らぬらすぐ改免るのが人の道是から

心を改めてこんな賤しい稼業のなさらずも手内職なぞ裁縫なり正しぬ稼ぎをなされましと云つゝ紙入の中より半圓紙幣一枚を出しハツツト紙に包と是は眞も輕少ながら相憎持合せがありはせんからどお竹の前へさし出しけり中西の手代文七はお竹も向むて尙ほ語を次ぎ眞も失敬ながら是で御隠居様に御老体の御滋養なるやう牛肉か鶏肉かお口も適ものを買てお上げ下さりませと云にお竹と氣れ毒さぢみそは包みをおし戴きお貰ひ申してのすみませんが折角のお思召しもあると云を打消し文七のホツト計りに嘆息し夫式の事に何のお禮も及びませう卿のお身の上は聞につけ心も懸るの主人の行末東区内で一二の舊家と自分免許で高々止れど内憂外患併至れる引續いての費用

且漸次お身産の瘦る計り卿のお内が好い標準今の間も改革せねば頓て卿のお内同様西區の出來星商人も横領さるる墓場へ草の生るやぢなるは必定既に主人の香具店の貸金の爲にお花房も取れて今でり同家の出店又朝川の墨筆店の巨文堂も同く花房の所有も成るのみか頃來聞けば同家の所有の濟島町の抱屋敷は本町の曲りの蘇野も占めらるたどやら是を見彼をば聞よつけ夜の目の寐られぬ小生の心配夫もひきかへ本町の水穂と東區内の舊家の内ではあまり人もお知られぬ小店小生の主人などでり別家か分家のやぢに内々下目も見てをりましたが此一新以來はメキく仕出して今では西區の烈しい商人も水穂の商賣上手には手を置いて後生畏るべくや此事だと口を極めて賞てゐる

どの評判卿のお内と水穂の店では親類は同様な舊しい交際  
 際彼家へ縫つて万事は依頼うち明ては相談をなされた  
 ら必ずお爲になりはせう小生も歸つたら店の大番頭利兵  
 衛にそのお内の果敢あひ始末を詳しく話して分別を借り  
 小生の店からも水穂の店へ程好く引合お成お事なら中西  
 水穂天野の三家が水と魚との交際を結び何彼もつけて談  
 と合ひ手引合て花房や佛蘭酒會社その他の烈しい西區  
 の商人の尖い商賣の掛引を防ぎ又二つお内本町の鷺野  
 の亂暴坊も禦ぐやう夫等の手段も盡力しませうと言つ  
 煙筒も煙管を納めつひれ話が長く成て思ひ切時間を費し  
 ました主家を歸る時刻の都合もあれば今晚は此まゝお別  
 れと致しまして何れ近日又お宅へ伺ひませうと言つ、立

をお竹の速て、片手も文七の袂を執へ片手も疊みし蒲團  
 を展すを文七は見て不審の面色「卿小生を引留めて未何ぞ  
 御用がおさりますか」と問はばお竹は耻しう「ア、お金を  
 戴いて只お返し申しての濟はせぬ故と聞よと文七は腹立  
 ち聲エ、お情なきないぞの言葉只返してのすまぬとはソ  
 リヤ如何いふお詞でおさります左迄も卑屈なお心もお成  
 り下りなされたか淺麻しいたどへ小生が無分別にも露の  
 情なきに預りたいとお頼を申したその處が如何も御零落な  
 されても天野の息女高が中西の手代の文七顔がさすも  
 る其儀のとお断りなさるのが當前夫に何ぞや卿の方から  
 袖褻ひくとえ大間違ひ卑屈と申しませうの猥褻と言ませ  
 うか云うやうのないお不心得と言れてお竹は顔赤らめ正

眞よ妾としの事が花房の壓制ゆるみ吾知す此も卑屈に陥  
 入たのか此夏本町の東堀を通つた時水碓に仲仕が妾を指  
 して淫賣々々云た時たへと瘦ても枯ても天野の娘茂淫  
 賣なと人のあんなほりな人を見下るよも程のあると涙なが  
 らよ吾家へ歸り父に土齋おその事を云て一晩悔し涙よ泣  
 死明したかいつの間よやら此様よ必の底から密賣淫よな  
 りすまし耻を耻とも思はぬ迄成り下つぬか淺麻しやと吾  
 と吾心強かこち泣き其は、其處へうち臥しけり。

其十九 牛頭馬頭の鬼よ齋しい二個の惡徒の手籠り難を圖す救く救濟の屋根船  
 (唄) 鴉啼でも知れそなものだ且暮お前の事計を八此うガラ  
 熊そんな時代な歌も唄ふな外聞の惡ぬ熊時お痘痕八や時  
 代といへばお姫様風な一件が出るのは確か此處等だなア

八ナニ一件どの熊合點の惡ぬ一件とは淫賣の事よ八淫賣  
 なら一件ぢやア一なくつて十件だ熊エ、餘計な事を云な  
 さんなそんな無益なこじつけより何と淫賣の喰逃げをす  
 る氣のねへか八賛成々々大ヒヤくたどへ喰逃げをまた  
 からと云つて先が不正の商賣だからマサカ無代淫賣の告  
 訴もしめへ熊代言口調でマラホウよ堅く出やア一がるな  
 八當世は是でなければ色事師よはならねへ熊色事師が  
 淫賣喰逃げとは大笑ひだ八夫はさうおその喰逃げの計略  
 の熊計策の密なるを以て可とほると能く講釋師のいふ客  
 れども中々甘口でいおぼつか締へマア一寸耳を貸ねへ八  
 友達づくだ首ぐるめ貸てやらうと云つゝ寄せる耳と口八  
 ム、ム、ム、天晴妙計奇妙々々おいむつゝ瓦屋橋を西へ



渡り来る、の記章伴天の裏を着ぬを誰の子分、の風紋りの  
 の手拭肩に二人の男橋の袂、佇立みたる女を見るより、點  
 首さ合ひ、此子だ、いひ、午傍に突、ト寄り月光、お透  
 見て、八姉さんお前、顔お似ねへ、悪い事をする子だ、の、熊  
 早く、茲へ出してしまおねへ、と云れて、女は不審顔、女、いつ、妾  
 が悪いことを致し、はしたッ、テ出せ、との、何をと言とせ、せ  
 果す、八ナ、悪いこと、の、した事、の、ね、る、と、此間、我輩等、が、二、人  
 連で、新、琴、平、の前、でお前、と、立、話、を、し、て、ゐ、る、時、特、務、に、見、つ、け  
 られて、喫、驚、敗、亡、熊、逃、る、機、會、も、己、ら、の、懷、中、の、道、樂、持、を、そ、ら  
 つて、逃、ぬ、が、悪、事、で、な、い、か、八、早く、出、さ、あ、い、と、交、番、所、へ、引、す  
 つて、行、か、ら、さ、う、思、へ、女、何、で、妾、が、そ、の、や、う、な、熊、悪、事、を、し、た  
 の、し、ね、へ、か、と、八、交、番、所、へ、行、け、ば、分、る、話、ッ、ト、も、早、く、吾、輩

等と一所に熊早く來ねへ、手を取て無理、橋向ふへ連て  
 行、き、藏、の、陰、な、る、川、岸、端、へ、ド、ウ、ウ、引、す、る、力、任、せ、手、足、を、押、へ  
 て、無、理、無、体、既、も、手、込、ま、せ、ん、と、す、る、折、か、ら、北、の、方、よ、り、漕、く  
 る、屋、根、舟、内、も、乗、つ、た、る、一、個、の、娘、ア、シ、ム、と、泣、き、わ、灸、く  
 河岸なる娘の聲を聞つけ、月に透して驚き、顔、チ、イ、船、頭、さん  
 早く、彼、の、子、を、助、茶、て、あ、げ、て、ど、い、ふ、を、聞、き、り、船、頭、の、舟、と、止  
 め、チ、ッ、と、合、點、で、ご、さ、り、ま、す、と、權、お、つ、取、て、河、岸、へ、應、然、ウ、ヌ  
 泥、坊、め、と、怒、鳴、り、付、れ、ば、二、人、え、是、も、不、意、を、打、れ、女、を、う、ち、捨  
 一目、散、迹、を、も、見、ず、し、て、逃、去、つ、た、り、舟、を、立、ち、ら、ぬ、づ、る、立、派、お  
 娘、乳、母、か、と、思、は、る、女、と、俱、み、大、地、に、泣、伏、す、娘、を、起、し、船、頭  
 と、一、所、お、介、抱、し、つ、月、の、光、を、透、し、見、て、チ、お、前、の、お、竹  
 さん、ヤ、ア、貴、女、は、水、穂、の、お、菊、さん、面、目、無、と、逃、れ、す、る、を、お、菊

は袂を曳止免今日の長堀の或紳商の忘年会に招かれたれ  
 と舟にて行く途中圓らす此處でね前さんれ難津を救ふも  
 不思議の縁人間の一生の七轉八起浮沈みのあるは世に習  
 る道龍先生に詳しく聞いてお氣の毒身お摘さきてお痛のし  
 さにドウの中西のお家でも御相談申し可成た丈のね世話  
 をして昔の天野のお店に復しよさ内々心をつのふてゐる  
 處此處でお目に懸つたの丁度幸ひマツともあくもアノ舟  
 へと泣入るお竹を誘わて徐よ船よぞ扶け入れける  
 其二十 湯の盤の銘々浮世の事故を談話し合ふ浴室の湯桁の高談  
 湯の盤の日々新も今日の宵越しの湯と共に陳腐く明治の

聖代の洗湯の浴客の拍手ふ應じて三助の忽ちちヒヤク  
 と水盤の袷を扱バ湯の断す新陳交退して時々刻々に新  
 り男女席を同ふせざる良風俗は軒下よ掲げし標目共  
 明々く朝廷の善政美法よ則て熱から迄又冷からす温度  
 能その中庸を得たる中船場の文明湯夕餉過の雑沓は宛も  
 鼎の沸が如く喋々々淘々沸々語るもゆれば笑おもあり  
 唄ふもゆれを號るもゆれ江湖の事故の談話お男といふ  
 字を三つ寄て何故かしほしとは訓さるかど不審を生ずる  
 男湯室の湯桁の隅よ一團樂淨留里小歌はうるさしと許由  
 めかして耳の端を洗ひながらの高談西區の花房が巨文堂  
 の筆店を何の爲に押領したのか一向ふ分りません何故と  
 いつては覽なさい彼の位れ財産を保ち何不自由の無い身

でありながら多寡の知れた小々な店を占領た處が支配人  
 をねらねばならず又下種も遣こねばならず却て餘分な入  
 費が掛る譯でございませんかねへ□助さん□○七さん  
 の疑惑も一理ありませすが是は中西の香具店を占領また  
 傳で元より墨筆のやうな小さな商賣目的にしてゐる花  
 房でいありませんが本店の商賣の一年度は何程と區役所  
 へ判然書出して商業税がゐるもゑ香具店や筆墨店で廿  
 二等の廿三等の下等税を拂つて置き彼處に諸方の商人が  
 仕入に立寄るを幸ひ密に本店の品物を密賣する目的でせ  
 う○左様なら曲りの鷺野が濟嶋町の朝川の掛屋敷取込  
 だのも其格ですか□ア同様なことだと思ひをますとい  
 ふ傍から△助が口を出し△か談話の中ですが鷺野の遺口

え只一概に密賣を仕やうといふ計でも陥りますまい例  
 の的が蠶食主義で得意を殖したり又子分増したりする  
 爲に喧嘩をする時の足溜りにする目算で本町の水穂の所  
 有地の眞津嶋を豫て垂涎してゐるといふ噂ですが是を矢張  
 り同じ考へかと思はれます○中西や朝川が良々摸範です  
 から水穂も迂闊おえ出来ませんか□水穂の店では豫てそ  
 の要領をしてゐるといふ事ですから滅多に氣遣ひのおさ  
 りますはい夫はさうと近來世間で評判の高いアノ風薬屋  
 の治祐湯一件えどうです△サア私もナットは聞ぬでもど  
 ざりませんが何分事が秘密に属してゐるのでどうも判然  
 しませんが何でも朝川れ店に關係のあることで朝川の手  
 代の内と水穂の出入の者とが何の相談とつけて朝川の店

を改革しやうとし、事から起つた紛紜ださうです。○その原因、此前水穂は店が中西と朝川の二軒を相手取り商賣の懸引乃紛紜で裁判を仰いで内濟です。はした事があつたが其時分からボツ／＼始つぬ事だと云が何分道路の風説です。から分らないと云のが眞實でせう。□眞實でも虚偽でもそんな事いどうでも好い此方等はどかく區内は事勿れだ。△時お一温もりして上をませう。○人の噂に身を入れて自身が風をひいてつはらないハ、ハツクシヨはい云口の下らもう風の先觸だ。

其廿一

劉關張の昔お倣ひて挑溪姉妹は義を結ぶ當世の三人娘 (上)

唐土の桃源玄都觀はいざ知で吾大坂の桃溪の桃ハ吉野の櫻月ヶ瀬の梅よ比ぶ一大奇觀花は盛りは數十町紅る匂ふ

霞の雲の錦繡織倣す別世界その中央は鎮座せる産湯の稻荷の神官の邸宅は集會ふ人々の花見をかねて懇親會酒とさん／＼三國志彼の桃林は義を結びし劉關張の三傑ならで水穂中西天野の三家の世嗣の娘の三美人お菊ねしんお竹を始めお菊の乳母のお三おしんの母のお華番頭利兵衛手代文七お竹の父の土齋又朝川の主人利之助同家の手代金右衛門など主従二十余名孰も東區まで舊家豪商と言はる、家格の事なれを主従の衣裳互に美を飾る中に自から品あり上下の禮義共に親を盡す中お自ら節有て何彼に秩序は能く調ひ一見人をして賞賛に耐さらしむるは趣きあま中にも衆目焔驚ろかせし三人の娘の粧飾へよて水穂のお菊の頭髮は西洋と日本の風とを折衷せる一種の束

髪に結ひ東京の名工某が天逆矛に摸しぬる金の管を以て  
 之を留め鼈甲より菊の蒔繪したる櫛をさし薄桃色に召縮  
 緬の下着を二つ重ね其上に光琳風の菊を染いだした  
 る黒の紋附を襲ひ菊の模様を織出したる古代の大和錦の  
 帯を締り中西のかしん固より華美を好む性質なれば頭  
 髪は大きなる島田に結むて金の根がけ城掛茶大なる翡翠  
 金足を添たる管を刺し金に飛龍の彫刻せる櫛をさし金  
 茶色の支那縮緬の下着を二つ重ね其上に紅梅の裾摸様の  
 納戸色の紋附を襲ひ飛龍の地紋を織出したる黒の古綴子  
 の帯を締め手と金の指輪を數個か穿め天野のお竹はやく  
 蓮葉なる性質なれど頭髪に銀杏がへしどかゆ風と東ね  
 て是を大なる珊瑚珠次につけたる金足の管を刺し瑠璃の櫛

をさし緋鹿子の下着を二つ重ねて其上に蓮の花を白く染  
 めぬきたる裾摸様の藤紫の紋附を襲ひ古錦襦の帯を締め  
 たるが濃抹淡粧各自其形容を異にすれども名も負ふ富隈  
 の娘やて自然に備へる高尙き品位殊に孰も衣姫も越々西  
 施を凌ぎ彌須陀羅女を欺く麗人美女のみあれは此桃溪の  
 花を羞みかかり花を見にとて集ふたる他は諸人の目より一  
 種艶麗極まる解語花娥見せしめ此處より一段の奇觀を添け  
 り今日お會主は即ち水穂のお菊にて過日瓦屋橋の濱にて  
 天野のお竹の危急を救ひて吾家より連歸りしが夫より先  
 中西の手代文七并よ北の島の修行人道龍法師の談話にて  
 を詳しく天野が零落の形状を知り中西の番頭利兵衛とも相  
 談なし天野中西水穂は互よ東區の舊家にて親族にも齊し

死 交際なれば傍観すべた。非ずと密に心を痛める際なれ  
 ばお竹の災厄を救ひたる由を利兵衛に告げ是も免ぬ中を  
 る朝川とも談合して花房方へ水穂中西朝川の三家より話  
 を附て舊債を償ひのひ新資本を貸て天野の家を再興し水  
 穂の番頭伊兵衛中西の番頭利兵衛が後見役となり舊業の  
 珠數屋の開明の時世に遅るる商賣なればて茶商も改  
 めさせ盛んに商業を営ませしが其補助の甲斐あててや天  
 野の店の仕方もち茶れを一つは之が喜びを表する宴會  
 二つは今後尙水穂中西天野および朝川の四家の水魚屋  
 漆の交りを結び他れ東區商人の勇氣を鼓舞し商業活潑  
 ありして西區の商人の凌虐を防がん爲めの懇親會を開き  
 なり酒宴や酬なる時お菊の起立りて衆賓に向ひ左の演

説をぞさしよけるお菊は統ひかゝる梅の花の如き愛らし  
 き口よ望鷲の谷の戸出る初音を此くやと思える、計りの  
 微妙なる聲をいだえて演説するやうお菊天野のお家の零  
 落を傍に観すおす其時は唇破きて齒寒しの喩夫に親し  
 中西様や朝川様や吾店を漸次お西區の商人に輕蔑され商  
 業の不利益を來すのみか随つて東區一般の耻辱と皆々様  
 に相談申せしに孰れを様も御承諾ありて天野のお家  
 を扶助下ささお蔭を以て天野様を昔の通りといふゆ  
 りおねと舊の屋敷を暖簾を掛け一本立ちなる商賣取引そ  
 れお禮を述べたさよお竹も代つて妾が會主も成り皆々  
 様を招待申せし此う打揃ふて能ふこそねいでお竹さ  
 ん尤固よと妾を誠み嬉しう思ひほす夫も就て此後のは相

談も申した之サテその相談といふは他でなれ中西様  
 のお所有の香具店又朝川様のお所有の巨文堂の筆墨店又  
 濟島町の掛屋敷を花房と鷲野に占領められ又妾方の所有  
 地の松島の屋敷をも曲野の鷲野が占領する手段去年の夏  
 んを平野町で妾よ仇した二人の凶漢又瓦屋橋の詰でお竹さ  
 んを手籠にした二人の凶漢も鷲野の子分と花房の出入の  
 者ぞおやら此勢ひお任して捨て置ゑら金力と腕力のある  
 お任して此末どんな亂暴を仕向けて来るかも知れざれば  
 今の間はその要慎是迄互も何や彼やと角芽立たる事も  
 れども夫を大川の水お流して處も幸ひ桃溪の桃の林の  
 今日集會おおしんさんお竹さんお妾と三人劉開張の  
 振と又倣ひ姉と妹の義を結び朝川様を共々に力を協せ心

を同おし智力も金力も資け合ひ飽迄商業も勉強して東區  
 の商人も舊家と門閥も誇り肝心の商業もは不勉強ぢやと  
 いふ世間を識りを撲消して西區の商人に侮られぬやう爾  
 來心と用ひたえは相談と申す此事よおそと言へバ利兵  
 衛の點頭きて利兵夫は何よと結構なは分別其事なれば貴  
 嬢れ方より私の方より願ふ所豫て貴嬢もは存知の如く先  
 年煙草一件の間違ひから花房や大東と裁判沙汰此方は不  
 馴先方と功者入費も透れてトウ和解おはけに損害要  
 償金を澤山取られ彼や此やで損の上塗大東と今度れ地所  
 の出入もやうく和解で事はすんだが重ねくの裁判入  
 費且ち商業の不景氣なとにて先祖傳來の家屋邸宅貯蓄の  
 財寶迄追々減少漸次お不如意の中西の身上といふ語を次

でおしんも進みぬでおしん「此ま、花房や大東や鷲野達の  
 吾儘勝手お任しておゐてえ終ゝ中西の暖簾は人の物と利  
 兵衛が度々の意見の言葉に妾も始て氣がついて内々心  
 配してゐましたが貴卿が爾ういふお心なら互お姉やも妹  
 とも成てと聞ぐりお竹の嬉しげお竹「お菊さんもねしんさ  
 んもそういうお心なれを妾も於て此様なといふ傍より朝  
 川始迄土齋文七お三も共々その喜びと雖しも同宏事どう  
 ぞ行末長く一家の親睦み互お實意をつくし合各自稼業に  
 勉強して主従協和上下一致西區の出来星商人も凌虐ぬや  
 ぢお云ふお菊の大に喜び皆さんがさぢいおね心もありさ  
 へすれば假令花房が獅子の爪蹴磨き鷲野が鷲の嘴を尖ら  
 すとも教師の雨森さんを後見よ之を防ぐお難らぬのと

當世娘性質畢

か遂おは是に上越す事も出来ませぢ如此な目出度い事  
 なぬ是より改めてお菊おしんお竹三人天を祭りて姉妹の  
 杯を取交し互々喜び興致つくしその日の夕方おのく吾  
 家へ歸りしが其後此誓を變ず互お信義をつくし商業を  
 助合ふまど眞の親氣の如く漸次又商業繁昌すれば花房  
 大東等の西區の商人の更なり疎暴極まる鷲野も如何ども  
 詮方なく従来どの違ひいと正確なる商業上の取引成爲を  
 るとぞ目出度しく

(終)



明治十八年十二月十二日御届  
明治十九年三月廿九出版

定價壹圓

編輯兼出版人

靜岡縣平民

鹽阪繁三郎

東京府神田區淡路町  
貳丁目四番地

大坂心齋橋北詰十五番地

發兌所

駿々堂本店

駿々堂本店新版發兌書目

爲替、大坂南船場郵便局宛に振込  
乞郵便切手代用ナレバ、但前金ヲ要ス

清水桃谷翁編  
●英學自宅獨習新誌

每月三回發行  
定價拾五錢

●目覺珍聞

每月三回發行  
定價五錢

谷俊三編  
●英文單語獨案内

洋本全一冊  
定價四拾錢

ウイリスン氏  
●第一リートル獨稽古

洋本全一冊  
定價五拾錢

サンダーニウソ  
●第一リートル獨稽古

洋本全一冊  
定價四十錢

●質屋庫

洋本全一冊  
定價八拾錢

●天一坊實記

洋本全一冊  
定價一圓廿錢

●怪談朧月花下風

洋本全一冊  
定價一圓

●新撰 吉凶禍福獨判斷

箱入洋本全一冊  
定價一圓

●楓時忠義礎

洋本全一冊  
定價一圓

●敵討天下茶屋

洋本全一冊  
定價七拾錢

●佐倉義民傳

半紙本全二冊  
定價四拾五錢

●敵討高田馬場

半紙本全一冊  
定價貳拾錢

●護國女太平記

半紙本全三冊  
定價四拾錢

●寬政秘錄夢物語

半紙本全一冊  
定價拾五錢

●慶安太平記

定價六拾錢

●不時珍客即席庖丁

洋本全一冊  
定價拾五錢

●世帯寶驗錄

洋本全一冊  
定價拾五錢

●遺言十ヶ條

定價拾五錢

● 六十品漬物鹽加減 洋本全一冊 定價拾五錢	● 交合秘訣 洋本全一冊 定價拾五錢	● ソエフストル氏 スペルリング獨稽古 洋本全一冊 定價三拾錢	● 夢想兵衛胡蝶物語 洋本全一冊 定價一圓	● 西洋道中膝栗毛 洋本全一冊 定價一圓	● 袖珍 保元平治物語 洋本全一冊 定價五拾錢	● 袖珍 道中膝栗毛 洋本全一冊 定價貳拾五錢	● 巷說二葉松 和本全貳冊 定價五拾錢	● 寶錄小芝廼山風 和本全一冊 定價三拾八錢	● 春宵 新街夜作樂 和本全一冊 定價三拾錢	● 交合條例 洋本全一冊 定價貳拾五錢	● 婚姻條例 洋本全一冊 定價拾五錢	● 雲間月 洋本全一冊 定價七拾五錢	● 花菱胡蝶廼彩色 洋本全一冊 定價八拾錢	● 袖珍 平家物語 洋本全一冊 定價五拾錢	● 袖珍 浮世風呂 洋本全一冊 定價四拾錢	● 袖珍 續道中膝栗毛 洋本全一冊 定價三拾錢	● 新編淀廼車 和本全二冊 定價五拾錢	● 珍說芋邊廼鶴 和本全一冊 定價四拾五錢	● 朧月小松ヶ 和本全一冊 定價四拾錢
------------------------------	--------------------------	--	-----------------------------	----------------------------	-------------------------------	-------------------------------	---------------------------	------------------------------	------------------------------	---------------------------	--------------------------	--------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-------------------------------	---------------------------	-----------------------------	---------------------------

● 善慈草流行新形 和本全一冊 定價四拾五錢	● 勤王 餘聞 園常夏 和本全一冊 定價三拾錢	● 今淨海六波羅譚 和本全一冊 定價三十錢	● 懷中日記簿 洋本全一冊 定價貳拾錢	● 諸民 必携 法律規則叢書 洋本全一冊 定價三拾錢	● 函入娘 洋本全一冊 定價拾五錢	● 商標條例註解 洋本全一冊 定價三拾錢	● 殺生石後日怪談 洋本全一冊 定價一圓	● 朝櫻日本魂 和本全一冊 價一圓五十錢	● 粹家 必携 豐歌集 和本全一冊 定價拾八錢	● 南海紀聞譽音信 和本全一冊 定價四拾五錢	● 新編黃昏日記 和本全一冊 定價三十錢	● 新撰 日記帳 洋本全一冊 定價五拾錢	● 增補 改正 五書獨案内 洋本全一冊 定價一圓卅錢	● 粹家 必携 系竹の栞 洋本全一冊 定價三拾錢	● 大塩平八郎實記 半紙本全二冊 定價三拾錢	● 日本 支那 西洋 料理獨案内 洋本全一冊 定價五拾錢	● 羅馬盛衰鑑 洋本全一冊 定價貳圓	● 北國奇談櫛の橘 洋本全一冊 定價一圓
------------------------------	-------------------------------	-----------------------------	---------------------------	----------------------------------	-------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	-------------------------------	------------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------------	--------------------------------	------------------------------	------------------------------------	--------------------------	----------------------------

● 鴈信壺の碑

洋本全一冊  
定價一圓

● 北雪美談金澤實記

半紙本全二冊  
定價五拾錢

● 水戸黃門仁德錄

半紙本全一冊  
定價六拾錢

● 怪談皿屋敷實記

半紙本全一冊  
定價四拾錢

● 歎討宗禪寺馬場

半紙本全一冊  
定價貳拾錢

● 佐野義勇傳

半紙本全二冊  
定價四拾錢

一讀  
● 妖怪府

洋本全一冊  
定價七拾錢

● 歎討名淺廣記

洋本全一冊  
定價七拾錢

● 右の外尙數多有之候且發兌の自他に拘らず御注文の分は非常勉強可仕候

● 又前記書籍御購覽に節は郵送料は敝店にて受持御送本可仕候

● 代金は郵便并銀行爲替券を以て御送金願上候郵便爲替局無之地方に限り郵便切手をも以て御回送被下候も不苦候へ共右は一割増みて御引受可申候事

大坂心齋橋北詰十五番地

稗史出版

● 書籍安賣本家

駿々堂本店

